

高木貞治再論

木村 洋 (Hiroshi KIMURA)

目的

筆者が2006年に「第二次世界大戦と高木貞治」を執筆して以降に得られた情報を祖述する。高木貞治の存在を既知と仮定する。

高木家の家系

姓氏研究の第一人者丹羽基二によれば、高木の祖先は石津郡の豪族高木彦左衛門に遡るといふ。1583年に豊臣秀吉が南近江から美濃国を經由して伊勢に向かった際、彦左衛門は西駒村砦で豊臣軍を襲撃した。秀吉は筒井順慶に迎撃させたが彦左衛門はこれを退けたので、秀吉は気骨を買って軍を駒野から引上げたという逸話がある。

高木貞治の視点から見た教育遍歴

一色学校時代、課外で四書五経の素読・日本外史と十八史略を読んだ。

「日本外史は面白く、本を読むのは面白いことだ、ということを教えてくれたのは、日本外史であったように思う。われわれは、平氏よりも源氏が好きで、しかしながら義経は可哀そうで、頼朝は憎らしかった。甲悦戦争では、勿論謙信びいきで、流星光底長蛇を逸したのは、實に残念であった。何といっても第一等の英雄は太閤様だが、清正と辯慶との優劣は、解決困難なる問題であった。雲か山か呉か越か、鞭聲肅々夜河を渡り、あの頃の少年に文藝趣味の接種をした山陽先生の恩恵は大きい」

「私は小学校で習った算術については、特別記憶していない。しかしその当時でも要目のようなものがあつたが、殆んど規則通りには行かなかつたようであつた」

岐阜中学時代、高木は数学者樺正董・英語教育者斎藤秀三郎などから教育を受けた。高木は中学教育に対して鋭い批判を向けている。

「漢文は文章軌範・孟子・左傳の拔萃などが、教科書であつたが、漢文に對する情熱は段々冷却した。漢文のためには相當な時間が費やされたのであつたけれども、どうやら中途半端で、教養として身についた所は甚だ少なかつたようである。その點、われわれは一代前の先輩に比して大に遜色があつたようである。

中學校へ入ってからは、英語が新しい刺激であつた。あの頃の中學校では、文部省の制定した學科課程などは勵行されなかつた。實際は、教員缺乏などのために、勵行不可能であつたのであろう。そこで、英・漢・數、中でも英語に主力が注がれたのである。何分、英語科そのものの外、地理・歴史から數學・理科まで英語の教科書を使ったのだから、授業時間の大部分が、事實上、英語の教課であつたといふべきである。われわれは、米國製のリイドルを卒えた後、マコーレーのエッセー二三種、ラセラス、ヴィカー・オブ・ウェークフィールド、アーヴィングのスケッチ・ブックなどを讀まされて、新しい世界が、わ

れわれの眼前に展開された。とはいっても、あの頃、西洋の事情を全く知らなかったのだから、本當の所が、どれほど理解されていたのか、今から考えて、よく分からない」

「我々が一番苦しんだのは、一年級のスペルリングであった。今の若い人は知るまいが、これはアメリカの子供に正字法を教える為のものである、アメリカの子供は意味はよく知っている語の綴りを暗記するのだが、吾々は意味を知らないで、発音を聞いて、綴りを言わされるのだから、無理な話である。先生がベーカー(baker)というと、生徒は、ビー・エー・ベー、ケー・イー・アール、カー、ベーカーと答えなければならない。こういう語を毎回数十暗記させられて、その成績によって、綴り方の時間の席順が毎回改められるのである」

1年生では田中矢徳の和訳算術教科書を使用した。高木と清水達雄の対談を引く。

高木「中学校の一年生から幾何学をやって、そして証明なんかユークリッド流なんだから。一年生からやったね。それから、逆はどうだとか、対偶だとか、あんなこと言われても、一年生はわからない。ところが先生もあやふやなんで(笑声)。ぼくは今でも記憶しているんだ。一年生の幾何の問題ね。あのころは田舎の中学で、ほんとの先生がいなかった。文部省でいろんな規則をこさえても、なかなか実行できないんだね。教員が不足でね。幾何に限らず、数学のほんとうの専門家というのは、あんまりいなかった――あれは、何といったかな。オポジット・アングルって言って、こういう、こういう……」

清水「対頂角ですか」

高木「ああ、対頂角は相等しいという定理ね。その逆を言えという問題ね。何を要求しているのかわからないね。先生がね。逆でいろいろにとれるからね(笑声)。ぼくは相等しいものは対頂角だなんていう、逆を書かなかった。それでえらい点数、零点をつけられたけどね(笑声)。ぼくは、めんどくさいことをね、直線の両脇にこうきて角が等しいときには2直角で……逆に書いたけれどそんなのいけならしいんでね。あのころは無茶だったな。文部省の規則を実行するに、先生がいらないんだね」

2年生以降はトドハンターの小代数、ウイルソンの幾何学の英語版を使用した。

「数学は外国の本を使つても内容の上では内容の上では大して差支えがなかったが、地理などになると随分辞書を引かねばならなかった。アメリカの一州が歐州の一國位の詳しさを書いてあり、日本などは終りの方に一寸附いているだけであつた」

「英語の力が足りなくて、教科書はたゞ問題を解くだけ位に役立つた。しかも方程式の応用問題となると随分辞書を引かねばならなかった」

「代数の説明などは二年生には逆も読めないから、先生が説明して、本では問題だけを見るというようなことであつた」

「今思つて見ると、吾々の受けた中等教育は――そう言つては、忘恩かも知れないが――實際ずいぶん乱暴なものであつた」

齋藤秀三郎の伝記を執筆した大村喜吉が、齋藤の件で高木にインタビューした記録を引く。

「土井晩翠翁は言う『世界的大数学者高木貞治君は岐阜中学で先生の教をうけた者である。ある日西方町に参上した折先生曰く「高木はばかに偉い頭脳をもつて、何とかして語学に引っこもうとしたが私は数学に向いてますと逃げてしまった」とて残念がられた』と。高木博士はこの齋藤伝説を否定されながら『齋藤先生に語学に來いと言われたことはない。また齋藤先生は文法・作文だけを担任された。特

に *Analysis* をやかましくやられたように記憶している』と語られた。私が高木博士にお会いしたのは昭和二十七年六月三十日、その年の十月一日発行の「学図」に高木博士は「中学時代のこと」を書いておられる」

高木と同期の吉江琢児(1897年7月東大数学科卒)は広島尋常中学校時代を次の様に回想している。

「それにしても今から考へると私達の受けた教育といふものはまるで目茶だつた」、「中學校は廣島で入學すると A, B, C も習はないうちに、いきなり原書をあてがはれた。歴史も地理も算術代數幾何も英語だつた。その頃は未だ外國の文物諸制度直輸入の時代、陸軍も佛蘭西や獨逸から教官を招聘してゐる頃で私達中學生の軍事教練の時でも振つてゐるのは號令に「中隊止れ」と言はずに「コンパニーハル」と言つたものだ。そういふ時代だつた。最初買つた數學の教科書はロビンソンの本だつた。私は家も貧しく、父が極めて嚴格だつたので、その頃攻玉社から出てゐたロビンソンの翻譯本を買つて貰ふことが出来ない。辭引と首引で讀むのだが、何せ英語の文法を習つてはゐないのだから無論問題の意味を理解することが出来ない。その爲めに數學で落第しさうになつたことがある。實にその頃は亂暴なものだつた。幾何の先生が慶應出身で、その先生は英語が上手だつたが幾何は全然知らないと來てゐる。先生が問題を直譯する。その直譯によつて私が解いて見せるといふやうなことだつた。「ロビンソンで落第に脅かされた私は友達から攻玉社の譯本を借り、丁寧に寫したものだ。今でもこの寫本は手元に残つてゐる。それから矢張り數學が好きだつたからだらうが私は自分で對數表を作らうとしたことがあつた。よせばいいものをセケタの對數表です。刻苦半歳に及びましたが、これは根氣負けがして途中で挫折してしまつた」

高木自身が第三高等学校時代について語つたのは以下の二行でしかない。

「代數がバーンサイドの方程式論、パツクルの解析幾何、ウイリアムソンの微積分學、オールデスの立体解析幾何學を習つた」

「高等學校、大學の時代には、 Dickens, サッカー、スコット等々を亂讀することは、出來たのである」

高木は第三高等学校時代を事実上殆んど語っていない。影響を与えたはずの數學教授河合十太郎(1889年7月東大数学科卒)・森外三郎(1891年7月東大数学科卒)に対しても言及が見当たらない。高木は自分の師に対して、何がしかのネガティブな側面を書き残していることからしても異例といつてよい。書く価値を認めなかつたのか、第三高校 OB だと思われなくなつたのかは不明である。

高木の同期卒業生 90 名中、高木と同じく理科大学に進學した者は吉江琢児(山形士族)・平塚忠之助(島根平民)・河野福太郎(愛媛平民)・青山長兵衛(京都平民)・平田敏雄(和歌山士族)・龜高德平(岡山平民)・塩谷應太郎(和歌山士族)・奥村英夫(岡山士族)・西川藤吉(大阪平民)・塚本又三郎(大阪平民)である。この内、友人として高木が言及するのは吉江一人で、同じく東大数学科に進學し、ドイツ留學時期も近い奥村英夫(1898年7月東大数学科卒)等については全く触れられていない。奥村は、高木より一期遅れて数学科を卒業した後明治生命に入社し、1899年10月30日に日本アクチュアリ

一会発起人、1899年11月4日に保険学研究のため日本郵船会社の汽船備後丸で横浜を出帆してゲッテンゲンに留学、1903年に生命表作成主任、1905年1月に日本初の経験生命表である明治生命保険株式会社実験死亡表を完成させたことで知られる。

当時の高木を知る吉江は「體操と製圖だけは僕の方がうまかつたがね。」と語っており、高木を頭一つ抜けた存在と思っていたという。吉江の回想から浮かびあがる高木像から推論するに、高木に隠したい過去があったわけではなく、単に聞かれなかつただけらしい。贅言を嫌う高木は、高校時代への言及を贅言と見做したのかもしれない。

高木の数学科進学時の1年生は、1年留年した石沢命春(奈良)、翌年哲学科に転科する八田三喜(石川)・吉江・留年する奥村英夫・近江幸治(宮城)・藤田外次郎(石川)であった。証言を幾つか引く。高木の証言。

「わたしどもの學生時代は、紅葉・露伴・逍遙・鷗外の時代であつたのだが、われわれは、紅葉よりは露伴が、逍遙よりは鷗外が、ひいきであつた。あの頃『讀賣』は文學新聞といわれていたが、外國文學は『國民』が紹介していたようである。インテリが『朝日』を読むようになったのは日露戦争の頃からであつたと思う。漱石の小説も朝日で讀んだが、後に單行本でも讀んで、流石にうまいと感心した。但、卒直に言えば、さあ、何と言つたものか、まあ、あまりに道徳的な、とでもいうか、それが長所でもあろうけれども、時としては、厭になると思つた。むしろ初期の作品、『猫』、短篇ながら『倫敦塔』、『カーライル博物館』などは、いつ讀んでも面白いと思ふ。『坊ちゃん』は善玉悪玉はつきり對立して明朗である」

吉江の証言。

「大學時代私は芝の白山町から徒歩で本郷へ通學した。無論當時銀座の一部に鐵道馬車があつただけで唯一の交通機關が人力車だつた。一番困つたのは本郷の大學が十二時で終り、二時から飯倉の天文臺で寺尾先生の講義がある時だつた。私は門外漢だつたから、どうかして平山君が休む時があると、寺尾先生も門外漢一人を相手では張り合ひがないものと見えて、「今日は平山が來ないから止めやう」と仰ることもあり、吞氣と云へば吞氣極る話だがその時の私は待ち呆けを喰はされた戀人のやうに腹立たしくも失望したものだ」

中川銓吉(1898年7月東大数学科卒)の証言。証言中の藤田とは、中川と同期の藤田外次郎である。「私が明治廿六年上京した頃は汽車の乗り方が分らないでドギマギしたものでした。物理の教科書で蒸汽機關の理論は知つてゐましたが實際に見た事がないのでネ高木君と一緒に汽車見物に出かけました」

「そもそも數学科としては高木藤田の兩君に私の三人で寄宿の集會室に瓦煎餅をカヂリつゝ圓卓會議式に討論しましたが大抵は雜談になつてしまひましたよ、まあ一緒に愉快に話し合ひ遊んだのですネ」
「學生時代の想出としては藤澤利喜太郎先生の偏微分方程式…特にミブンと發音される…はハナから無試験との事で嬉しく聽講しましたので今だに何も知りません、力學…先生はリヨクガクと云はれる…の鶴田助教授は意地悪くて怨み骨髓に徹しましたが或時三日もつづけて試験をやつたのでもう宜いだらうとホツとした途端に四日目にも試験されて泣きました。圖書館にも雑誌が三冊位でした」

第三高等学校・東大で1年先輩だつた林鶴一(1897年7月東大数学科卒)と高木の逸話。

「林博士とは學生時代痛飲馬食大にメートルをあげられたものだ。ある時例によつて御兩所思ふ存分

にハメをはづし気焰當るべからず、林博士が俺はウエバーのやうな世界一の大數學者にあるんだと云へば高木博士は言下に、「俺はウエバーの娘を貰ふんだ」といつてカんだと云ふから、青年高木の面目がいかにも颯爽たるものであつたか分らう」

藤澤セミナーについての高木証言。高木は、群論・ガロア理論を日本で最初に紹介した。

「あれはただ本を読みましたんだけど。ぼくらの前のクラスから始めたんだがね。セミナーというのを日本でやったのは、初めてだぜ、あれが。このごろはむやみとやっているが、三年生がいろいろ問題を当てがわれたもんだ。あのころは主に代数さ。ぼくらの前の人は、3次方程式の解き方とか、5次方程式がとけないとか。あれは明治何年かな。ぼくら30年だから、29年から始めたんだな。

それは東京数学物理学会というていたんだけど、何にもしなかったから金が余ったんだ。会費ばかりとって何もしないから。それでセミナーなんか出版した。それから、自分で記事なんか出してから、金が足りなくなった。もとは何もしなかったんだから金が余った」

当時の教育に対する1941年1月時点での高木の回顧。

「僕が大學を卒へてドイツへ三年行つて歸つた頃のもの、いまの青年學徒は大學卒業の頃持つてゐるのだ」

高木の第一回渡欧

帝大理科大学数学科を卒業した高木は、大学院では「代数学及広義ニ於ル「アリスメチック」」を研究題目とした。「アリスメチック」を研究題目にした元田傳(1889年7月数学科卒)以降、2番目の代数系専攻の大学院生となり、留学生に充当された。

高木の証言を引く。

「わたしは明治三十一年にドイツに留學して、ベルリンに行った。あの頃は、高等學校で習った第二外國語では間尺に合わないというので、先生について語學の稽古をしたものである。會話の練習が目的なのだから、教材としては、やさしい喜劇、短編小説などを使った。それが病み付き、というわけでもないけれども、先生からは獨立して、獨りでも讀むことになって、わたしなどは、餘分に讀んだ方ではないかと思つている。勿論、讀むといつても、辭書と首引で讀むのではない。分からない語は分からないままで讀む。西洋人の話すのを聞いているのだと思えば同じ事だ」

「シラノをベルリンで觀劇するために、ドイツ譯で讀んだ。譯者はフルダで、彼自身、當時ハウプト・ゾーデル兩マンと雁行するといわれていた相當な作家である。自分で原作のやうな物は書けないけれども、書かれたものを自國語で書くのならば、文章には腕に覺えがあつて、隨分原作者に拮抗し得るといふわけなのであろう。他の一例は即興詩人。

語學の稽古になるといつて、芝居も見た。先ずテキストをよく讀んでから見るのだから隨分骨が折れた。古典ものは王立劇場で見たが、あそこでは、ファウストなどは禁制であつた。ファウストはドイツ座で見た。名は忘れたが、何とやらいうドラマトルグの演出は好評であつた。グレイチエンの部屋の場で、彼女の歌うマイネ・ルー・イスト・ヒン、マイン・ヘルツ・イスト・シュウエヤ云々の歌などは、本で下讀みし

た時の豫想とは違って、激越な調子で早口にまくし立てるので驚いたが、実際その方が適切に相違ないから、感心して今だに覚えている。今参考のために、鷗外譯を出して見ると、「心の落ち着き無くなりて、胸重苦しかりにけり。」云々。これは、あまりに悠長、いささか滑稽である。ドイツ座では、重に新しい物をやっていたが、あの頃はハウプトマンが盛んに書いていた時代であった。シェクスピヤの物も頻繁に上演されたが、シェクスピヤは英語ではむずかしいけれども、ドイツ譯はよっぽど分りよいと思った」

「ゲッチンゲンへ轉學してからは、芝居は見られなかったが、あの頃、ゲッチンゲンに、これも名は忘れたが、世界的に有名なシェクスピヤ學者がいて、そこへスコットランドから、確かアバチンの教授でピーチーとかいう人が留學に来ていた。わたしの同僚の吉江琢兒君と同じ家に寄宿していたから、折々會つたが、その人に教わって、フィッシャー、Vで書くフィッシャーだが、そのシェクスピヤ評釋を読むことができた。ハムレット、オセロ、マクベス、ロメオとジュリエット、その外何があったか覚えていないが、芝居で見る前に讀めたらよかったのに順序が顛倒した。

音楽は分からないから、ドイツではオペラは見なかった」

高木の後に渡欧した吉江の証言。

「獨逸に留學中ゲッチンゲン大學の大數學者クライン博士の講義を聞いたことがあつた。談適々當時獨逸に架せる大鐵橋の話となつた時氏は言ふ、「米國にて架せる鐵橋は多量の鐵材を充分に使用してゐて立派である。我獨逸では鐵材は高價だが、幸ひ數學が安價だから之を充分使用して堅固な橋を架ることが出来る」と。この比喩は巧みに純正數學と、その生活に齎す恩澤を物語つてゐる。我邦は鐵、石油其他の資源に決して豊ではない。しかし安價な數學で國家繁榮の道を拓くことが出来ると思ふ。

又或る時同氏は私に「君の國では風が盛ださうだが、その理を考へて見てはどうか」と言はれた。私はその頃純正數學以外のことは餘り興味がなかつたので、その儘にしたが、今にして思へば當時既に同氏は航空機を考へて居られたのである。（當時無論航空機はない）又有名な數學者リレンタールはその當時既にグライダーの研究を始めてゐたが、その理論的根據に自信を懐くや、大膽にも自ら之を作成し、操縦實驗中墜死してゐる」

「クライン先生を頼つて出掛けたのですが、矢張りあのヒルベルト先生の方がよかつて、そこで勉強しました。ヒルベルト先生の下ぢや、ひどく鍛へられたものでしたがそれももう夢の様な氣がします」

高木のドイツ留學時代について、吉江以外の証言は確認されていない。例えば同時期にドイツ留學した心理學者松本亦太郎は「遊學行路の記」（第一公論社、1939. 10）などで、複数の日本人留學者と広汎に親交を深めたことを記述しているが、高木とは行動範圍が全く合致しなかつたようである。當時の実質的な在独日本人による会誌 Ost=Asien（日本語訳は東亞。ほぼ全巻を東大図書館が所蔵）に掲載されている在独日本人の住所氏名録をもとにして調査を進めたが、高木と他の在独日本人のネットワークとの接点は発見されなかつた。高木研究が困難な理由は、交際範圍が非常に狭いことにある。他の數學者ならば実に多彩な痕跡が得られるのだが、高木の場合は友人・学生会・県人会・趣味とい

った人間関係の結節点がほとんど見当たらない。人間関係を意図的に遮断したのかもしれない。高木のゲッチンゲン滞在中、三高時代に教えを受けた河合十太郎がライプチヒに留学し、漢学の服部宇之吉・電気化学の大幸勇吉・瀧廉太郎などと交流していた事は判明しているが、河合と高木がドイツで交流をもったかすら判明していないのである。

本田教授の先行研究では、1900年6月5日に高木と吉江の写真をベルリン留学中の地理学者山崎直方(日本地理学の父と呼ばれる)がWilhelmshöhe公園で撮影したことと、1901年10月17日付でシャルロテンブルクから水野なる人物(物理学者水野敏之丞か)がゲッチンゲンの高木に絵葉書を出したという言及がある。在ベルリン理工系日本人留学生は“理工會”に属していたので、高木は理工會員と接点があったのであろう。帰国後の高木は、同じく帰国した山崎と3度接触したことが確認されており、高木と山崎が親しい関係だったことが伺える。山崎は日記を遺しているが、戦災で焼失したのか過去に調査対象となっていない。

帰国後の高木と山崎の接点が最初に確認されるのは、津軽英麿伯爵帰国に際してである。1904年2月27日、ベルリンで法律学を学んでいた津軽が18年ぶりに新橋駅に到着した。津軽は留学中の一時期に藤澤利喜太郎と同一宿舎に居住したこともある人物で、在伯日本人に多大な影響力を持って居たとされる。高木と山崎は、1904年3月27日午後連れ立って津軽邸を訪問したという。ベルリン時代のお礼言上であろうか。

高木貞治の講義内容

1901年にドイツから帰国した高木は、東大数学科助教授として代数学其の他の講義を開始した。代数学は数学科では必修講義であるが、物理学科や天文学科には選択講義ですらなかった時期も多く、受講者証言が極めて少ない。理工学部一年で線型代数学が必修となるのは戦後のことであり、そもそも線型代数学なる科目が無かった。東大数学科での門下生証言については本田教授が調査済みと推論されるので、他の証言を紹介する。

高木の講義風景は以下の形容で言い尽くされている。

「断片的な要領を紙片にかいたものだけで幾らでも続けられる。その講義ぶりが亦博士獨特のもので、聞きとり難い低聲、然も肝腎なところになると一人でニコニコしながら一層小聲になる。おまけに白墨の尖端をつまんで軽く書かれる板書の文字が薄いと來てるので、大抵の學生は悩まされる。でも下宿に歸つて、ノートを読み返してみると中々味のある講義で、ハハアと初めて妙味がわかるといった類だ」

微分積分学を長年担当した坂井英太郎が1932年に退官後、高木は微分積分学を担当することになる。高木は前任者坂井の講義内容を踏襲せず、劇的に改善を加えて解析概論に結実させた。坂井の講義に対する受講者側の感想を幾つか引く。高木の講義にはこの種の批判が公的になされたことがない。30分遅れて講義室に出現したなどの逸話が流布されている高木の講義だが、試験が難問ばかりだった、容易だった、落第した、という種類の証言は見当たらない。

1904年度に東京帝国大学理科大学理論物理学科に入学した田邊尚雄の証言。田邊は学部1年で愛知敬一講師の解析幾何学を受講した。

「私の一年のときの講義が愛知先生の初講義であった。それゆえ初めの一学期間は、世界に於ける算数学の権威である藤沢利喜太郎先生が、側に監視して居られた。しかし愛知先生の講義は要領を得て非常に覚えよかった」

藤澤の性格を考えると、数学科教官の高木・吉江等の講義も最初は監視したのであろう。高木の講義に好感を持たたか否かはわからない。藤澤が高木をどう評価したかは明らかではないが、高木が藤澤の人格面に好感を持っていなかったという仮説を導入すると、好感を持っていたとする仮説より実に多くの事が説明できることは事実である。高木による藤澤追悼文は複数存在するが、最初に帝国大学新聞に執筆した文を相当部分使い回している。Hilbert に対しては、このような使い回しは見られない。高木は追悼文で藤澤を評して“主義の人”と書いたが、主義の内容の言及評価解説は避けている。

本田は「彼は初対面の客でも、すぐその人間的特徴を見てとった。それもどちらかという、良い方ではなく、悪い方の特徴をすぐ見抜いたそうである」と書いている。藤澤は、東京帝国大学理学部数学科講師の囑託を解かれた1922年4月7日まで教壇に立ち、事実上高木にとって唯一の上司だったが、この二人を心温まる師弟関係・上下関係として描写することは、存外に難しい。

1905年9月に東京帝国大学理科大学理論物理学科に入学した寺沢寛一の証言。寺沢は学生時代、教官が使用する種本を特定する特技を発揮しており、極めて貴重な証言と言える。

「高木先生は非常に声が小さくて、黒板の字も小さく、講義者としては落第でした。ウェーバー(Weber, H.)の『Lehrbuch der Algebra』をたねにしておられたのではないかしら」

1910年7月に東京帝国大学理学部物理学科を卒業した池田芳郎の証言。

「私の学生時代東大物理学科の図書室は大部屋で半分に学術雑誌、単行本があり半分に机が並べられて閲覧室になっていた。ここに先生達も時々見えられたが先輩の人も来ていた。先輩の人と話をする社交室であった。数学教室の図書室は教授室の片隅であった。大きい部屋の窓側に教授の机があり高木先生、吉江先生、中川先生がいた。戸棚の鍵は各教授がもっていて机の上に置いてあるノートに書名と自分の名をかいて御願いと貸出して下さった。この様な状況で勝手なことは出来ないが読みたい本の名や内容について指導をうけることができる。先生方に御迷惑をかけたが皆親切に教へて下さった。数学の学生と同様にして下さった」。

1921年5月に東京帝国大学理学部天文学科を卒業して大学院に進学した萩原雄祐の証言。

「その頃、僕は、天文台に雇われて、BROWNの表で月の暦を作らされていたのだが、相対論で天文学を書きかえてやろうなんて、若いものだから、大それたことを考えたんです。まず、相対論で二体問題を解かなくちゃというので、大学院に入れてもらって、午前中は高木(貞治)さんの代数、整数論やマトリクス、モヅル函数、線函数などの特別講義、吉江さんのは、学生のときみんな聞いてしまった。中川銓吉さんの非ユークリッド幾何や曲面論、射影幾何学、これが、みんな役に立っています」

1924年頃、高木邸で個人教授を受けた山崎謙(本名染谷謙)の証言。

「およそ芸術家にせよ科学者にせよ、まぎれのない本ものならば、歴史の発展方向に弓を引くような反動思想で満足するはずはない。数理学の学習に力をそそいでいた青年時代の僕が個人的に格別の指導を受けた高木貞治さんは、戦争中の「大本営発表」に業を煮やし、「聴き手が賢くなるより仕方がない」と、吐き棄てるようにいっていた。寺田寅彦なぞにくらべて、同じく科学畑の人間でありながら、月とすっぽんの懸隔である。

関東大震災の翌年ごろと記憶するが、僕は、デデキントや、カントールにとりくんでおり、難解な箇所につづかるたびに、高木先生をわずらわしたから、お目にかかる機会はわりに頻繁であった。用件がひととおりすむと、奥さんのいれてくれた紅茶をすすりながら、いつも彼は、すでに目にあまるほどになっていた軍の横暴を指摘しつつ、文化擁護の必要を述べたてた」

山崎は、1922年にモスクワ・極東勤労者大会に参加して帰国後、独学でフランス語・ドイツ語等を習得した時期があり、この時に高木の講義を受けたものの様である。1925年に東大での「ブハーリンの史的唯物論」研究会に出席、早稲田大学哲学科・大学院を経て哲学教授となるが、拘留中に警視庁から脱走した高倉テルを匿ったとして逮捕されている。弁証法論理学の体系化に従事した戦闘的哲学者として戦後知られることになる山崎は、高木と政治的会話をしなかったと見られる。

留学先のドイツで東大経済学部統計学講座担任糸井靖之が客死したことで、1925年8月21日付で統計学講座の後任となった経済学者有澤広巳の証言。

「数学は全然習わなかった。数学を習うようになるのは、それから助教授になって約一年たったときに、糸井先生が亡くなったんです。そこで、大学当局としては、糸井先生が統計学講座の担任者になっていたんだから、先生が亡くなったとすれば、すぐ後継者を養成しなきゃいかぬというので、どううかがんかわからないけれども、あるときぼくの部屋に舞出(長五郎)先生がやってきて――まだ学部長じゃないけれども――ぼくに統計学をやれ、君は糸井先生の演習も受けたんだから、統計学をやれというんです。ぼくは、嫌だといったんだ(笑)。舞出先生がんばって、君が色よい返事をするまでこの部屋を動かないという。ひどいものだ。それで、結局とどのつまりは統計学もやる、しかし、ぼくは経済学もやりますよ、二足のわらじを履きますよと、そのときにいった。「それでいい、統計学は東大の一つの講座でちゃんとしたところだ。行く行くは講座の担任者になるんだから、しっかりやってもらわぬと困る」といわれた。

それで、統計学をやるようになったについては、数学をやらにゃいかぬということになった。それからだれに相談したかな、理学部の先生に相談したら、湯島の天神さまの下の方に住んでいた偉い数学者だった。高木貞治さんだったかもしれぬけれども、そこへ数学を習いに行ったんです。そうすると、高木先生はあまり偉すぎて、教えてくれないんです。これはとてもはしにも棒にもかからないと思ったかどうか知らないけれども、とにかくコーリレーション(相関)の計算ができるまでやればいでしょうなんて、それで少し教えてもらった。

高木先生というのは、ぼくは感心したのは、この答えが出るには、この式がなきゃいかぬというんです。一つの問題が出ていて答えはこうだ、その答えになる式は、この二つの式が出てこなきゃ答えにならない。あれはどうしてできるかな。(笑)」

有澤の統計学講義及びゼミはデータによる実証重視型で、高等数学を殆んど使用しなかった。

1926年3月に東京帝国大学理学部物理学科を卒業した山内恭彦の証言。

「大学を卒業する時分に、行列力学、量子力学が出始めた。高木貞治先生の代数の講義を、もぐりで聴いていたので、一次代数、群論のことは一通り知っていたので、数学的方法の理解には苦しまなかった」

当時、欧州で勃興した量子力学に必要な代数学の知識を、大抵の物理学者は持っていなかった。山内は広く読まれる Weyl「量子力学と群論」を翻訳出版し、日本に於ける群論ペストの発生源とされた。高木は群論ペストをただの麻疹扱いしている。

1930年に東京帝国大学理学部物理学科に入学した伏見康治の証言。

「高木先生の講義はぜひ聞かなくちゃいかんと云われたもんだから、二度ばかり行ったんですけど、よく解らなかったから逃げだしちゃった」

1931年4月5日に北海道帝国大学理学部数学科に第1期生として入学した穂刈四三二の証言。

「私は東大の高木貞治教授と東北大の藤原松三郎教授の集中講義で代数学の学士試験を受けなければならなかった。藤原先生の講義は原稿を持参され、はっきりした言葉でわかり易く、ノートも綺麗にとれた。これに反して高木先生は、Van der Wearden の *moderne Algebra* を持参され、小声で講義されるので聞きとりにくく、理解に苦勞した。集中講義で来学された先生を接待するつもりで一席設けたところ、逆に先生にご散在をおかけしたこともあった。このような酒席で先生方から教室では受けられない多くのご教示をいただいた」

北大理学部は新設当初、代数学・理論物理学・地球物理学の講座が新設されなかったもので、当初は外部から講師を招聘することになっていた。高木は翌年の ICM1932 で van der Wearden に初めて会い、その若さに驚いたという。高木が講義用の数学書を持ち込んだ証言は他に見当たらないので、藤原と相談して *moderne Algebra* を使用したのであろう。尚、同年に東大数学科に入学した矢野健太郎は、高木が『代数学講義』の校正刷を手にとり、代数学の講義をしたと記述している。

1936年3月に東京帝国大学理学部物理学科を卒業した今井功の証言。

「高木先生の講義も非常によく解りました。岩波の数学講座の『解析概論』が出るのに合わせて、原稿をもってきて話をされるんです、ですから後で本が出たときに読めばよく解るということです」

1937年3月に東京帝国大学理学部物理学科を卒業した高橋秀俊の証言。

「東大理学部では学年を一学年、二学年……というかわりに前期、中期、後期という。その前期は基礎科目ばかりで、力学を含めてほとんどが数学の科目といってよかった。ほかに実験物理学という講義と、物理実験第一というのがあった。物理学を志して入ってきた学生には、がっかりする者も多かったようであるが、私はもともと数学が好きだから、別に不満はなかった。特に有名な高木貞治先生の「微分積

分学」は岩波書店刊の『解析概論』といえども理工系の学生なら知らぬ人はないが、それが講座「数学」の中的一篇として出たばかりの頃で、それを大先生から直接話を聞けるのは嬉しかった」

高木と教科書

大学院生当時の高木は博文館から新撰算術(1989年)を刊行し、デデキントの切断を取り上げた。本田は「当時の日本の数学書の水準をはるかにこえている」と評価したが、確かにその通りである。

当時の教科書を語る上で、教科書疑獄(1902年)を無視することは出来ない。県の自由選定だった教科書を採用させるに当たり、教科書出版社が教科書採用担当者に贈賄したという事件である。

当時の教科書は各都道府県独自採択制で、採択後14年間は教科書を変更しないことになっていたことから、当然のように贈収賄が誘発された。教科書疑獄事件に関係した金港堂・集英堂・普及舎・富山房・国光社などが発行する教科書が採択禁止となり、県知事2名、文部官僚、学校長、教科書会社関係者等200名以上が摘発され、116名が有罪判決を受けて終結したが、高木の著書・新式算術講義(1904年)の版元である教科書販売の大手・博文館は、教科書疑獄では連座せず他社のシェアを奪うことに成功した。

旧弊な教科書が疑獄で市場から一掃された結果、一種の近代化がなされた。高木の同期の吉江は中学教師をしたことがないという理由によって中学教科書執筆をせず、中川銚吉は留学先から帰国した1905年に富山房から執筆要請を受けたが、先行して執筆していた菊池大麓・寺尾壽(1878年12月東大物理学科卒)・藤澤利喜太郎(1882年7月東大物理学科卒)・澤田吾一(1891年7月東大物理学科卒)・高木・林鶴一(1897年7月東大数学科卒)と競合したくないとして1918年まで遷延した。結果、中学校数学教科書は、長く寡占状態が続いた。

新式算術講義について、現在確認される一番早期の書評は神奈川県第一中学校教諭白井龜吉(1905)である。

「計算の基礎を論じたる最もよき参考書は理學博士高木貞治氏の新式算術講義なり然れども同氏の中學校教科書として出版せられたるものは全く別物なり中學校教科書程度の算術書にて四則計算の組み立て方を比較的完全に述べられたるは寺尾博士吉田學士共編の中學校數學教科書算術之部なり」

高木の名を一躍著名にした同書だが、自身はほとんど評価を与えていない。高木の評価を引く。「あんなもの、無責任な話だけど、アルバイトのつもりで書いたもので、あんなもの今ごろひっぱりだされては(笑声)」(1957)

この発言から半世紀後、筑摩書房が同書を再刊する未来を高木は当然知らない。

高木は、初等数学教育では細密な論議を回避する手法を採用している。

「例のプラト一の「幾何を知らぬ者は門に入るな」というあの伝統。あれは大人に向かっていうことで、子供じゃないね。だから中学校でやるようになったら、子供目当てでなくて、頭の訓練のためですからね。訓練のためだったら、ごく簡単なものを選ばなければならない。それには幾何が一番いい。ほかのものでは、ものそのものが複雑だから、なかなか幾何のようにああいう証明がいかない」

「幾何なんか証明ぬきにしたら、何にも教えることはない。わかり切っていることばかりで、何があるか

な。三角形の内角。一度きけば忘れやしないね」

「語学もそうなんだ。あれもやっぱり頭の訓練さ。だからラテン語ね。違った言葉で理解すること、それから違った言葉で自分の考えを言いあらわすことも、それは頭の訓練だ」

「ぼくはどっちかという訓練主義だけだ」

高木は初期に博文館から、次いで開成館から教科書を多々単著名義で刊行している。類体論の論文執筆に至るまでの空白期間中、同僚が教科書執筆に関わる負担を軽減し、研究活動に専念することに大いに貢献したわけである。

明治から大正にかけての数学教育に高木が与えた影響は少なくないはずだが、数学教育分野で活躍する藤澤に遠慮したのか、数学教育業界に積極的に関与することはなかった。20年近く東大数学科教授が順送りで担当した教員検定委員会臨時委員を勤めているが、目立った活躍の形跡がない。

明らかなのは、「幾何学は難しいものであるから、難しいまま教えるべきだ」とする藤澤の主義を、簡単なものを教えるべきだとする高木が否定している点である。藤澤は寺尾壽が執筆したフランス式理論算術に基づく教科書に対抗し、日本の社会情勢に適合する算術教科書を執筆した後、中学校向け代数学教科書を複数執筆したが、初学者向けとしてはレベルが高すぎた。実際、藤澤の代数学教科書は参考書の位置付けに留まり、チャールズ・スミス著初等代数学(長澤龜之助訳)が広く教科書として採用された。寺尾の数学教育思想を批判した藤澤の思想も、国際的には時代遅れと見做されている。

数学教育の改良を主張した数学教員養成機関の東京高等師範学校グループは、保守の牙城のように藤澤を描写している。藤澤も、東京高等師範学校のグループに対して感情的な疎隔があった事が伺える。しかし、東京高等師範学校グループが高木を批判したことは無いようである。高木と東京高等師範学校グループの間には色々交流があったためかもしれない。

藤澤門下生で、藤澤流の数学教育論に代わるものを最初に提示したのは高木と林鶴一である。吉江・中川は藤澤との対立を回避する处世術として教科書執筆を回避したのかも知れない。

高木が中学校数学教科書執筆から離れた時期は、類体論論文の時期と一致するが、翻訳物から脱した国産数学教科書が流通し始めた時期とも一致する。

1932年、文部省図書監修官塩野直道は、国定小学算術教科書を根本的に改訂編纂する為、算術教育の代表者十数名を集めて意見を聴取する場を持ったが、高木は欠席した。

高木の行政的的活動其の他

高木は行政職に関係を殆んど持たなかった。名声が高まるに伴い、数学界を代表した様々な名誉職についたが、実務能力が問われたことは無く、具体的な貢献の痕跡が全く見当たらない。

1905年4月29日に11名が出席した日本数学物理学会常会で次期役員として選出されたのが、学術行政に関与した最初と思われる。ちなみにこの日選出された事務委員長は長岡半太郎(1887年7月東大物理学科卒)、事務委員は高木貞治・本多光太郎(1897年7月東大物理学科卒)・中川銓吉・寺田寅彦(1903年7月東大実験物理学科卒)である。

1904年、東大理学部教授だった人類学者坪井正五郎の没後、“人類学関係の蔵書1600部余りを坪

井教授記念文庫の名で東大に寄贈、油絵肖像 2 面を作成し東大と坪井家に寄贈(現存)、醸金に余裕あれば処理は実行委員に処理を一任する”という記念資金の発起人の一人となった。東大理学部教授会メンバー全員が発起人となっているが、藤澤が 5 円を納付してから高木が 3 円、中川銓吉が 1 円を納付している。納付額が公開されるので藤澤より多く納付するのを避けた模様である。

1915 年 11 月上旬、大正天皇の即位大礼に文部省勅任官東京理科大学教授理學博士の肩書で参列し、下京区新町蛸薬師下ルの毛利タケ方に投宿した。11 月 8 日に藤澤と藤野家に投宿していた山崎直方は、17 日午前由高木と京都御所見物をしている。

「今日は大禮参列の人々に紫宸殿と大嘗宮との御儀の跡を拝観するを許されたれば、高木貞治君と共に午前十時より御所に行き、刺を警手に通じて宜秋門に入り右に折れて御車寄の前を過ぎ月華門より南庭に入る。其鋪設當日と異なることなし、唯威儀の人を缺くのみ、右近橋の敷多貫を結びて漸く色づけるを見つゝ、紫宸殿の西階を上り南榮に俯して審かに高御座と御帳臺を拝するを得たりき。紫宸殿の紫の帳は閉ちられたれど、高御座の帳は擧げられたるまゝにて、中には黒髻に螺鈿したる美はしき御椅子と劔璽の案を安し荘嚴極みなし、高御座と御帳臺の上に高く立てる金色の鳳鸞は低く伏して漸く觀るを得たりき、東階を下り日華門を出で春興殿に顔つき、更に建春門を出で仙洞御所に至る。

正門を入れば正面に頓宮あり、右に折れ東に轉じて板垣の御門を過ぎ、大嘗宮の宮域に進めば、西北隅に釜殿あり小忌の御湯を立てし所なり、宮城の北に廻立殿あり、悠紀主基の二殿は各帳殿、小忌帳舎、庭積舎、樂舎、風俗歌座など屬して其南に正に對稱的に東西に並べり。柴垣を繞らし、四方に神門を設け、東西兩門の外に膳屋あり、何れの殿も黒木造りにして外壁には近江表を張り、竹椽を圍らし屋根は茅葺きにして又皮附きのまゝの千木堅魚木あり、床下にも又茅を布けり、何れも嚴かに鎖されたれば内部を拝する能はず。廻立殿の南廊に御菅蓋を拝す、白木の柄の上端には瑞鳳の像を刻みて五彩に色どれり。殿を繞れる柴垣のおしぶちには椎の和惠とて、その小枝の規則正しく間をきて挟まれるも今日は明かに見ぬ。庭積物舎に捧げられし國々の産物の既に撤せられたるは理りなれど何となく寂しき心地せられぬ。凡て蒼古の御造りさま仰くだに尊しとも畏こしとも言の葉の盡し得べきにあらず。南の神門を出づれば、曩の日着床せし帷舎あり、之れより板垣の門を出て右すれば正門に出でぬ。それより美術倶楽部に茗蕪を訪ふて歸る」

1918 年 7 月頃、東大物理学科の卒業記念集合写真に撮影された。共に撮影された教官は大森房吉・平山清次・坂井英太郎・田中館愛橘・長岡半太郎・田丸卓郎・中村清二・寺田寅彦・佐野静雄・木下季雄・西川正治等である。写真嫌いの藤澤は集団写真に写ることを拒否した模様である。高木は、藤澤追悼文でこの種の集合写真に藤澤は常に参加していたと書いているが、高木が参加した集合写真に反例が存在したことになる。

1921 年には三崎臨海実験所に 25 年勤務した東大理学部雇青木熊吉に、東大理学部教授会メンバー全員を中心に慰労金を出すことになり、藤澤が 3 円、高木・吉江・中川が 1 円を納付している。

1921 年に藤澤が学術研究会議会員を辞任した後、学術研究会議数学部は部長に高木を、副部長に藤原松三郎を選出した。藤澤に代わる数学界の第一人者として評価されつつあったらしい。高木が何らかの行政的な活躍をしたという記録は見当たらないので、藤原が行政的な活動を代行したものと見られる。

1924年3月17日と24日、科学奨励を目的とした日本科学促進会の創立打ち合わせがあり、林春雄・平山清次・亀高德平・片山正夫・三宅驥一・脇水鉄五郎・谷津直秀が出席した。出席はしなかったが、連名で発起人を募集することを承諾したのは麻生慶次郎・藤原咲平・今村明恒・中村清二・永井潜・佐野利器・鈴木梅太郎・高木貞治・高松豊吉・山崎直方であった。これとは独立に、学術研究会議が同様の組織を設立することを建議し賛成可決したので、日本科学促進会創立計画は中止された。

1924年12月1日、亀高德平の斡旋で自然科学聯合会設立趣意書を添えて学術研究会議会長男爵古市公威名で52名の学者に招待状を発し、12月14日に帝国学士院で創立打合せ会を開催した。満場一致で自然科学聯合会設立は可決し、数学科から出席した高木貞治・中川銓吉を含む出席者全員が発起人となることとなった。更に、特別委員30名が指名され、高木は委員となっている。

1926年1月12日、高木は帝国学士院例会で初めて論文報告を行った。

帝国学士院総会で高木が提出紹介した論文

総会開催日	著者名及び例会報告論文表題(表題は全て原文ママ)
1926年1月12日	高木貞治「代数方程式相互簡約に就て」、末綱愨一「イデアル論に於ける或る函数のマキシマル、オールドヌングに就て」
1926年6月12日	辻正次「解析的函数の零点に就て」
1926年10月12日	辻正次「ピカールの定理に就て」、菅原正夫「相対循環体のフューラーに就て」
1926年11月12日	末綱愨一「イデアール論的函数のマキシマル、オールドヌングに就て」、清水辰次郎「有理型函数の性質に就て」
1927年2月12日	吉田洋一「冪級数の部分和に就て」
1927年3月12日	清水辰次郎「超越整函数の一性質」、西内貞吉「非ユークリッド平面に於ける代数曲線に関する点の冪に就て」
1927年4月12日	末綱愨一「イデアール論に於ける二三の函数のマキシマル、オールドヌングに就て」
1928年2月12日	竹田清「置換群のキャラクターの冪和について」
1928年5月12日	清水辰次郎・彌永昌吉「或る冪級数の部分和の特性に就いて」
1928年7月12日	清水辰次郎「微分方程式の解の唯一性の充分なる条件に就いて」
1928年12月2日	森嶋太郎「フェルマーの予想に就て」、竹田清「定義方程式の有理解に就て」
1928年12月2日	竹田清「定義方程式の有理解に就て」
1929年2月12日	清水辰次郎「有理型函数の理論に就いて」、彌永昌吉「相対的アーベル数体のフューラーに就いて」
1929年3月12日	辻正次「或種のマトリクスのキャラクタリスティック方程式の根に就て」、正田建次郎「有限輪に附属する群に就て」
1929年5月12日	森嶋太郎「フェルマーの予想に就て(第二)」
1929年7月12日	森嶋太郎「フェルマーの予想に就て(第三)」
1930年1月12日	正田建次郎「有限アーベル群の自己変形環又は自己変形群に就て」
1930年2月12日	竹田清「群の表現が凡て単項の形に変形せらるゝものについて」、彌永昌吉「マトリックス」に関する定理」

1930年3月12日	正田建次郎「有限群の単純群に就いて」
1930年5月12日	正田建次郎「有限群の指標の結合に関する「フロベニウス」の論文に関する研究」
1930年6月12日	正田建次郎「整係数の行列論に於ける対等及び包含定理の群論的証明」、黒田成勝「論理代数学に関して」
1930年6月12日	黒田成勝「論理代数学に関して」
1930年7月12日	森嶋太郎「ウエルマーの予想に就て」、守屋美賀雄「素数次の相対的循環数体の類数に就て」
1930年10月12日	森嶋太郎「フェルマーの予想に就て(第五)」, 黒田成勝「論理代数学に就て(第二)」
1930年10月12日	黒田成勝「論理代数学に就て(第二)」
1930年11月12日	南雲道夫・福原満洲雄「連立微分方程式解の安定に就て」、福原満洲雄「連立常微分方程式の積分曲線の集合に就て」
1931年2月12日	高木貞治「自然数論に関して」、竹田清「可解置換群の原始性に就て」、黒田成勝「論理代数学に就て(第三)」
1931年4月13日	竹田清「可解群の単項表現に就て」(朗読省略)
1931年5月12日	竹田清「可解一次変換群について」
1931年11月12日	荒又秀夫「或る種の代数体の \mathbb{Z} 函数整除性に就きて」
1932年3月12日	森嶋太郎「フェルマーの仮想定理について(第七・第八)」
1932年6月12日	中野秀五郎「或るマトリックス函数に就て」
1933年2月13日	荒又秀夫「デデキントのツエタ函数の整除性に就て」
1933年5月12日	守屋美賀雄「円錐に於ける単数に就て」
1933年11月13日	竹田清「メタ・アーベル式 p 群の構成に就て」
1933年12月12日	浅野啓三「有限群を共線変形にて表現すること」、森嶋太郎「フェルマーの仮想定理について(第十報)」
1934年4月12日	正田建次郎「正規単純超複素系の鑑別条件」、中村正「ペー進斜体に関する一定理」
1934年6月12日	正田建次郎「正規単純多系の判別式の定理」、正田建次郎「正規単純多系上の判別式の公理」
1934年10月12日	正田建次郎・中村正「二つの互に素なる判別式を有する「アルゼブラ」類の積について」、中村正「正規単純多元数系の判別式の正田氏の定義について」
1934年10月12日	中村正「正規単純多元数系の判別式の正田氏の定義について」
1934年12月12日	黒田成勝「ツエーゲルの代数的数の近似の精密化」、守屋美賀雄「絶対的類体の類数に関する注意」
1935年3月12日	稲葉栄次「アーベル体の類数に就て」
1935年4月12日	末綱愨一「或る三次体に於ける L 函数について」
1935年10月12日	中山正「素数指標の体上のアルゼブラについて」、森嶋太郎「フェルマーの予想に就て(第十二報)」
1936年3月12日	フランチェスコ・セヴェリ「代数面上の点集合の或る例」
1936年5月12日	中山正「素数指標の体の上のアルゼブラに就て(第二報)」, 淡中忠郎「与へられたる p 群を有するがらあ体存在に就て」

1936年7月13日	中山正「一つの“アルゼブラ”に於ける二つの「イデヤル」の和及び共通分に関する注意」, 守屋美賀雄「無限代数体の「ベイ」進体上の除法代数」
1936年7月13日	守屋美賀雄「無限代数体の「ベイ」進体上の除法代数」
1936年12月12日	守屋美賀雄「一元代数函数体上の類体論の推進定理及び終結定理」, 守屋美賀雄「無限代数体上の全局的類体論」, 黒田成勝「二次無理数に由る近似について」
1937年3月12日	秋月康夫「約数連鎖律を有する「アインアルチヒ」なる環における「イデヤル」論について」, 小松醇郎「コンベクツム」の基礎群に関する注意」
1937年5月12日	大島勝「表現論の一定理の証明」
1937年6月12日	守屋美賀雄「有限常数体を有する一元代数函数体上の類体論の純整数論的建設」
1937年11月12日	菅原正夫「ジゲルのモジュラル群の n 次の変換論について」, 河田敬義「代数函数体上の類体論の守屋方程式に関する注意」
1938年1月12日	菅原正夫「ジゲルの「モジュラル」函数の不変性」
1938年2月12日	菅原正夫「高次のジゲルの「モジュラル」函数について」, 小平邦彦「一般の細胞の概念及び複合体の細胞分裂について」
1938年2月12日	小平邦彦「一般の細胞の概念及び複合体の細胞分裂について」
1938年5月12日	河田敬義「代数函数のリイマン面について」
1938年10月12日	正田建次郎「半線状変形による有限群の表現の等値性について」, 正田建次郎「半線状変形の有限群の不変式について」, 吉田耕作「抽象積分方程式とストカスト過程」, 吉田耕作「バナハ空間に於けるエルゴード定理」, 角谷静夫「バナハ空間に於ける線状作用子のイテレーション」, 坂田良次「緊密体を球に写像すること」, 小松醇郎「細胞空間のベッチ群について」, 寺阪英孝「フェルバンドの表現について」
1938年11月12日	吉田耕作・角谷静夫「平均エルゴード定理のマルコフ過程への応用」, 小松醇郎「細胞空間の被覆について」
1938年12月12日	吉田耕作・三村征雄・角谷静夫「有界核の積分作用子」, 吉田耕作「マルコフ過程の作用子論的処理」
1939年1月12日	彌永昌吉「複合体の分体に於けるベッチ群不変性の一証明」, 小松醇郎「細胞空間の被覆について(第二報)」
1939年3月13日	坂田良次「多面体を球への変形に関する一つの問題について」, 河田敬義「線状群の指標」, 近藤孝一・古屋茂「正規行列に関するテプリッツの定理の一証明」
1939年5月12日	角谷静夫「抽象 L 空間に於ける平均エルゴード定理」, 荒又秀夫「アルテンの L 函数の一意性について」, 吉田耕作「マルコフ過程の作用子論的処理(第二報)」
1939年6月12日	小平邦彦「次元論に関する一つの注意」, 吉田耕作・角谷静夫「バーコフのエルゴード定理と極大エルゴード定理」, 角谷静夫「弱位相とバナハ空間の正則性」
1939年7月12日	小平邦彦「ヒルベルト空間の作用子論の基本定理について」
1939年10月12日	竜澤周雄「或種の整係数多項式の既約性について」, 吉田耕作「漸次的概週期性とエルゴード定理」, 角谷静夫「マルコフ過程の作用子論的理論に於ける二三の結果」
1939年11月13日	浅野啓三「倍数連鎖体を有する環について」

1939年12月12日	河田敬義「一般球函数の理論について」
1940年3月12日	吉田耕作「安定分布のマルコフ過程」, 角谷静夫「エルゴード定理と安定分布のマルコフ過程」, 角谷静夫「弱位相, コンパクト集合及び双対律」, 小松醇郎「細胞空間の被覆について(第三報)」, 安倍亮「局所的コンパクトなるアーベル群の同型対応について」, 国澤清典「抽象空間に於ける抽象値函数に関する定理」
1940年4月12日	近藤孝一「交代群の指標の分解について」, 彌永昌吉・小平邦彦「群に於ける概週期函数の理論について」
1940年5月13日	小平邦彦・安倍亮「連結されたるコンパクトなるアーベル群について」, 小平邦彦「リー群の一パラメータの部分群の微分可能性について」
1940年7月12日	吉田耕作「個別エルゴード定理の抽象化」, 中山正「単列環及び広義の単列環小引」
1940年10月12日	菅原正夫「一般ゼタフックシヤン函数について」, 菅原正夫「ポアンカレ空間の拡張」, 吉田耕作「ベクトルの理論について」, 安倍亮「単純系に関する注意」
1940年11月12日	中野秀五郎「半順序代数」
1940年12月12日	浅野啓三・中山正「部分体に於ける整数論に関する一注意」, 中山正「歪体の正規底」, 河田敬義「フェルバンドの乗法系の一意的表現について」
1941年1月13日	小平邦彦「測度確定の写像群について」, 黒崎千代子「一つの共線変換と変換可能なる共線変換について」
1941年3月12日	吉田耕作・深宮政範「正則に凸なる集合について」, 中山正「左右のイデヤルのラッチスが逆同型なる代数」, 岩澤健吉「特殊射影群の単純性について」
1941年4月12日	亀井栄一「アインアルチヒなる環に於ける共通分定理について」
1941年5月12日	吉田耕作「単位を有するベクトル束について」, 稲葉栄次「環状数体の類群の構造の類体論的解釈」, 守屋美賀雄・小林よし「変換群に於ける分解律の一つの必要なる条件」, 守屋美賀雄・小林よし「変換環に於ける分解律の一つの充分なる条件」
1941年6月12日	吉田耕作「ベクトル束と加法的集合函数」, 森田紀一「一般フックス群の理論に関する注意」
1941年10月11日	中野秀五郎「半順線形距離空間に就て」, 中野秀五郎「位相空間に於ける連続函数の全体に就て」, 中野秀五郎「一般 C 空間の特徴付けに就て」, 正田建次郎「一般代数的系に就て」, 正田建次郎「環の元素に関する注意」
1941年11月12日	大島勝「群の表現のクロネッカー性について」, 守屋美賀雄「安全体の有限分離代数体拡張の或る性質」
1941年12月12日	吉田耕作「単位を有するベクトル束に就て(第二報)」, 菅原正夫「一般化されたるシュワルツの予備定理」, 森田紀一「一般ポアンカレ空間に於ける変位の解析的特徴付け」
1942年1月12日	中山正「束式賦序の群に就て」, 守屋美賀雄「ディスクレート賦値の完全体上の除法アルゲブラの構造」, 菅原正夫「一般フックス群の基礎領域に就て」
1942年2月12日	守屋美賀雄「ディスクレートなる完全体上のアルゲブラの類の群に就て」, 守屋美賀雄「ディスクレートなる完全体上の局所類体論(第一報)」

1942年4月13日	正田建次郎「一般の代数系に就て(第二報)」, 中山正「完全整閉なる整域に関するクルルの推測に就て」
1942年5月12日	正田建次郎「一般代数系に就て(第三報)」, 中山正「クルルの予想に就て(第二報)」
1942年6月12日	正田建次郎「一般代数系に就て(第四報)」, 中野秀五郎「一般 C 空間の特徴に就て(第二報)」
1942年7月13日	正田建次郎「有限群に就て誘導される指標に関する注意」, 吉田耕作「ベクトル束の表現に就て」, 河田敬義「弱い意味のエルゴード定理に就て」, 中野秀五郎「ノルムを有する半順序モジュールに於けるリース・フィッシャー」
1942年10月12日	守屋美賀雄「局所類体論(第二報)」
1942年11月12日	中野秀五郎「半順序モジュールに於ける或る線状汎函数に就て」, 船山子之助・中山正「合同の束の分配性に就て」, 吉田耕作・中山正「半順序環及びスペクトル定理へのその応用」
1942年12月12日	中野秀五郎「一般半順序線型空間の拡大に就て」
1943年1月12日	小林正史「抽象束の公理に就て」, 中野秀五郎「半順序ノルム線型空間の連続性に就て」
1943年2月12日	正田建次郎「一般代数系に就て(第五報)」, 小松醇郎「順序を保存する写像の束の特徴に就て」, 小松醇郎「和同型の変換束の一つの特徴に就て」, 中野秀五郎「一般半順序空間の拡張に就て」, 守屋美賀雄・中山正「直接完全体のノルム剰余記号の理論に就て」, 守屋美賀雄「局所類体論(第三報)」, 吉田耕作「半順序環及びスペクトル定理へのその応用(第二報)」, 角谷静夫「無限の積可測空間論小引(第一報)」
1943年4月12日	彌永昌吉・安倍亮「ヘルムホルツの空間問題に就て」, 吉田耕作「不変換で密なる群の双対定理に就て」, 角谷静夫「無限積可測空間に就て(第二報)」
1943年5月12日	角谷静夫・中村正弘「可附番集合のパナハ極限及びチエック緊密化」, 中野昇「整域に於ける Ideale の可逆性に就て」
1943年6月12日	正田建次郎「一般代数系に就て(第六報)」, 岩澤健吉「自由群に関する二三の定理」, 河田敬義「一つの群上の可測概周期函数の平均値に就て」, 河田敬義「標準環に於ける極大 Ideale の拡張に就て」, 角谷静夫「ヒルベルト空間の単位球の位相学的性質」, 松島與三「素数指数のライ環に関する注意」
1943年7月12日	河田敬義「アーベル群のウエール測度に関する注意」, 吉田耕作「ノルム環とスペクトル定理」, 小平邦彦・角谷静夫「局所的に緊密なる Abel 群の Norm 環」, 角谷静夫「緊密なるアーベル群に関する計量数に就て」
1943年10月12日	霜田伊佐衛「抽象空間に於ける解析函数に就て」, 吉田耕作「ノルム付きの環とスペクトル定理(第二報)」, 中山正「位相学的自由群小引」, 角谷静夫・安西広忠「局所コンパクトアーベル群のホールのコンパクト化(第一報)」
1943年11月12日	正田建次郎「一般代数系に就て(第七報)」, 正田建次郎「シュライヤーの拡張定理に就て」, 河田敬義「広義に於ける混合型の測度不変写像に就て」, 河田敬義「積空間に於ける測度不変写像に就て」, 稲葉栄次「有限アーベル群の部分群を成すモジュラー束に就て」, 角谷静夫・安西広忠「局所コンパクトなるアーベル群のボーアのコンパクト化(第二報)」, 彌永昌吉・安倍亮「ヘルムホルツの空間問題に就て(第二報)」
1943年12月13日	竹田清「次数が二つの素数冪の積なる部分群の存在に就て」, 黒田成勝「ベル方程式に就て」, 安西広

	忠「コンパクトなる位相環に就て」、中山正・松島與三「 p 進除法アルゲブラの乘法群に就て」、河田敬義「バナハ空間の作用素環に就て」、安倍亮「リー群の空間に於けるリーマン度法と体積素に就て」
1944年2月12日	安倍亮「ホロノミー群の加約性に就て(其一) 擬似接続の空間」、中山正「無限位の単純分配素に就て」、岩澤健吉「位相群の群環に就て」、吉田耕作「ノルム環とスペクトル定理(第三報)」、角谷静夫「発散する級数及び積分に就て」
1944年3月13日	角谷静夫「ルベツク測度空間の不可離拡張の構成」
1944年4月12日	安倍亮「ホロノミー群の可約性に就て(第二報)」、吉田耕作「ノルム環とスペクトル定理(第四報)」、小平邦彦「Riemann 集合體に於ける調和 Tensor 野に就て(第一報)」
1944年5月12日	小平邦彦「Riemann 集合體に於ける調和 Tensor 場に就て(第二報)」、吉田耕作「ノルム環とスペクトル定理(第五報)」、中山正・安倍亮「表現モジュールの不可約性及絶対不可約性に就て」、小平邦彦「二階線状楕円型微分方程式の境界及び固有値問題に就て」、乙部好一「コンパクト性の準値に就て」、乙部好一「局所コンパクト環小引」
1944年6月12日	中山正・東屋五郎「無限位の単純分配系に就て(第二報)」、岩村聯「極限の一般化」、小平邦彦「Riemann 集合體に於ける調和 Tensor 場に就て(第三報)」
1944年7月12日	小平邦彦・角谷静夫「局所的 bikompakten 群に於ける Haar 測度に就て」、吉田耕作・岩村聯「アーベル群の二種位相の等価性」、壬生雅道「測度と位相との関係」
1944年10月12日	吉田耕作「ノルム環とスペクトル定理(第六報)」、正田建次郎「一般代数系に就て(第八報)」、高橋陸郎「自由積における部分群定理に関する注意」、角谷静夫「自由位相群の無限直積位相群」
1944年11月13日	角谷静夫「 n 次元空間に於けるブラウン運動に就て」、吉沢尚明「連続函数の同時拡張に就て」、吉田耕作「フーリエ積分による函数の表現に就て」、壬生雅道「無限積空間に於けるベール函数に就て」、中山正「綜合環の右イデアルの束に就て」、静間良次「閉リー群の部分群に就て」
1944年12月12日	角谷静夫「二次元ブラウン運動と調和函数」、森田紀一「正規反線型変形に就て」
1945年3月12日	高木貞治「整数及実数の公理性に就て」、功力金二郎「平面上の測度正なる集合の密度に関する一定理に就て」、岩本秀行「面積の概念に基く測度空間の幾何学(第一報)」、岩澤健吉「零冪位相群に就て(第一報)」、角谷静夫「二次元のブラウン運動とリーマン面の型の問題」、中山正「正規底の定理の半線型への拡張と誘導底の存在へのその応用(第一報)」
1945年4月26日	岩澤健吉「二重射影空間に於けるベズーの定理」、岩澤健吉「代数的対応の理論に就て(第一報)」、岩本秀行「面積の概念に基く測度空間の幾何学(第二報)」、角谷静夫「マルコフ過程とデリクレの問題」、功力金二郎「ポテンシャル論に関して(第一報)」
1945年7月12日	長尾弘「シュライヤーの拡張定理と正田のそれとの関係に就て」
1945年11月12日	岩澤健吉「代数的対応の理論に就て(第二報) 対応の掛算」
1946年4月12日	中山正「正規底定理の半線状拡張及びその応用(第二報)」、寺坂英孝「線状連続体について」
1946年5月13日	高木貞治「オイラー方陣小引」
1946年9月12日	吉田耕作「一般ユークリッド空間に於けるユニタリ相等について」、壬生雅道「ハール測度の拡張」、中山正「整閉域に関するクルルの想定について(第二報)」
1946年12月12日	東屋五郎「単純環の理論の新構成」、中山正「不可約環に就て」

1947年3月13日	功力金二郎「コーシーの積分定理について」、中山正「同型の既約且不可分解なるモジュラー表現を有する有限群」
1947年5月12日	後藤守邦「冪零行列のレプリカ及びリー代数の線状表現可能性について」、松島與三「行列のレプリカ小引、代数的リー群について、リー代数のカルタン分解について」
1947年10月13日	功力金二郎「ポテンシャル論に就て(第二報)」

1931年に大阪帝国大学が創立され、高木は初代阪大総長長岡半太郎による理学部数学科教授選考の相談相手となった。この人事で、小倉金之助は講師に就任した。当時の大学制度では、助教授任官した場合は高等官七等・従七位となるが、講師は一年単位で嘱託・解嘱される不安定な立場に過ぎない。小倉自身が書き残した証言によれば、正田建次郎が小倉の助教授以上の任官に反対したこと、林鶴一門下であるために藤澤に配慮した長岡が動いた等の主張がある。林は数学教育改善運動に関与し、藤澤とは鋭く対立していた。この人事に小倉は複雑な心理操作を要したかもしれないが、後年高木と座談会に参加しているように、高木には含むところが全くなかったようである。高木と林が親しい関係だったからかも知れない。

1937年には帝国大学工科大学初代学長古市公威を記念する故古市男爵記念事業会発起人となった。

1942年11月3日、岩波書店が回顧三十年感謝晩餐会を大東亜会館で開催し、数学界からは高木・末綱恕一・掛谷宗一・彌永昌吉が出席した。

1947年3月13日、帝国学士院総会で「掛谷宗一追悼の辞」、1948年4月12日に日本学士院総会で「吉江琢見追悼の辞」を講演した。

日本学士院例会で高木が提出紹介した論文

総会開催日	著者名	例会報告論文表題
1949年4月	久保忠雄	「一つの領域に於けるポテンシャルに就いて」
1949年10月	吉田耕作	「フォッカー・プランクの方程式の拡張」
1950年5月	辻正次	「整函数に関するウイマンの定理」
1950年10月	吉田耕作	「流から作られる確率過程」
1950年10月	伊藤清	「リー群におけるブラウン運動」

日本学士院会員小泉信三の1949年6月21日付・谷村豊太郎宛書簡を引用する。小泉は慶応義塾大学長として高木と面識があった。

「先日四年振りで学士院授賞式に出席、高木貞治先生に会い、互に久潤を叙しました。先生アゴ髯を蓄へられ、年もいくらか取られたやうに見え、一寸見遅えました。二人で貴兄の御噂をしました。「文春」を読まれたら喜ばれることと思ひます」

文藝春秋1950年2月号誌上で、「現代日本の百人」として高木の自宅でのグラビアが紹介された。

同誌は日光整数論シンポジウム名誉議長となったことが契機となつてか、1955年11月に自伝記事「一数学者の回想」を掲載している。「一数学者の回想」を一読すれば明瞭だが、散文的筆致の同回想

は高木の筆になるものではなく、文藝春秋の編集者半藤一利に対して口述した内容をまとめたものである。半藤による2015年8月13日付消印の筆者宛私信の内容を紹介する。

- ① 「高木先生は、たしかにちょっと耳は遠くなっていたようで手で耳を前のほうにだすような仕草はたびたびされました。同じ話をくり返したりはしませんでした。ましてやカンシャクなどはいっさいされませんでした。ただ、ゆっくりでした」。
- ② 「二階の部屋(和室)でお話を承まりました。階段をコトン、コトンとゆっくり上ってきました。独力で、着物姿で、ヘコ帯をいとも上のほうに締めておられるのが、おかしかった思い出があります。つまりごく無雑作に、という意味です。まさに雰囲気は浮世離れしている感じでした」
- ③ 「ていねいに、私などシロウトがわかるように、数学に関する話をしてくれましたが、私にはさっぱりで、まったく覚えておりません。私の母方のイトコに稲葉三男(熊本の五校の教授だったかと思いますが)という数学者がおり、そのことを話したとき、なぜか、大そうなつかしがっている思い出(といってもそれほど数多くではありませんが)を語っていただいたように、おぼろげな記憶があります」
- ④ 「とにかく、形容詞になるかと思いますが、仙人のような雰囲気を漂わせている先生でした。文士とか文学研究者などにはない、利害関係など憂世のいっさいの些事を超越されている感じでした。それにしても、どうして文春の(つまり私の)依頼に応じられたのか、いま懸命に考えても思いだせません。どなたかのツテがあったのかな、とも思っているのですが」
- ⑤ 「そうそう、必要なことだけを話す。余分のことはいっさい話すことはなかった、と記憶しています」

解析学者の稲葉三男(1930年3月東大数学科卒)は、高木の講義を聴講していたので、記憶に残ったのであろう。

類体論完成当時の高木

1901年に帰国した高木は1903年に「複素有理数域におけるアーベル数体について(独文)」で東大から博士号を取得した。博士号取得前後に東京数学物理学会報告で英文論文を数本投稿しているが、当時の観点から見ても優れた内容とは思われない。無かった事にしたのであろう。

それから1914年7月28日に開始された第一次世界大戦(1918年11月11日終結)まで、目立った学術論文を執筆していない。この空白期間は、高木を語る上で見過せないところである。学問上の蓄積をしていた、病気で休養していた等、後年様々な説明がされているが、当時は学位論文執筆で研究者として燃え尽きた帝大教授の典型と見られたらしい。数学に関する東宮御学問所御用掛として、同期の吉江琢児が推薦され1915年6月29日から1921年3月1日まで就任したが、推薦者の藤澤にとって、高木は吉江に見劣りする存在だったようである。高木には病歴があったなどの配慮があったからかもしれないが、勤務中に疾病で休職する場合、官報なり文部時報なりで告知されるものである。高木は東大在職中に病気で休職したことはない。国内第一級の人材たるべき東宮御学問所御用掛として物足りない存在と判断されたのが事実に近いものと見られる。東大数学科教授中で、藤澤を除いて中学校数学教科書を執筆するなど数学教育に経験を持っていたのだが、

ところが高木は1915年に「相対的「アーベル」体の理論について I・II」・「楕円関数の虚数乗法の理

論について」、1917年に「冪指標の一性質について」、1920年に「相対的「アーベル」体の理論」・「任意代数体に於ける相互律」を東大紀要に独文で書き上げるに至った。英文ではなく独文で執筆したことから、当時の敵国ドイツの読者を想定していたことが伺える。内容を評価できる数学者がほぼ敵国にしかないという事は、国内での評価が期待できないというに等しい。国内に適切な査読者がいない状況なのである。高木はこの状況を「無競争」と表現した。「解析概論」に見られるように、高木は証明の誤りが時折発生するタイプの数学者だが、類体論論文に関しては証明の誤りがあったという話は聞かない。誤り検出に相当なエネルギーを投入したことがわかる。

第一次世界大戦中、ドイツを初めとする欧米各国からの文献が途絶したことで、自分で考えることにしたと高木は論文執筆事情を明かしている。ここで文献の途絶について語る場合、欧州の数学からの隔絶を指したものと解釈されていたが、舶来の文学作品の読書に振り向けられていたリソースを研究に回した側面も否定しがたい。高木は英独仏語の文芸作品の原著を狩猟し、ロシア文学(戦争と平和)やスカンジナビア文学はレクラムのドイツ語訳を読んでいた。

「若い頃は余暇にまかせて英獨佛の新作家の文藝作品を讀破した」と言い、その代金支払いのために教科書を執筆したと語るほどである。高木は無趣味を公言しているが、文学関係の読書にかなりの時間と資金を投入したことは疑問の余地がない。この嗜好は、高木の文体表現に対して明確に多大な影響を与えており、横光利一・太宰治・立原正秋などの作家が高木の文体を称揚し、著作に流用したのも理解できることである。高木の特異な文体は、この文学趣味に起因する。

高木は水準が高い論文をドイツ語で、水準は低いオリジナルな論文は英語で、水準を論じるまでもない論文は和文で執筆する統計的傾向がある。少なくとも、類体論関係の論文に対して高木の自己評価は高かったのである。

不幸な事だが論文の反響は当初全く見当らない。東大紀要には査読が無いので、国内ではチェックが働かない(当時は、欧州でも証明に瑕疵のある数学論文が印刷されることがあった)。東大紀要は高木の期待するドイツ語圏内でも読まれていなかったらしい。戦時中のドイツに高木の論文が届く事は有り得ず、敗戦はハイパーインフレで東大紀要を取り寄せる資金に事欠いていたドイツの国内事情を鑑みれば無理もない。

1917年に出版された大日本文明協會編「日本の科学界」(大日本文明協會事務所)は、日本国内の科学界における研究状況をまとめた文献で、高木の研究については以下の記述がある。

「楕圓乗法に一步を進めた虚數乗法の問題の研究に至つては我が數學者中、前記の高木博士に及ぶものがない。蓋し虚數乗法の問題は十九世紀の後半に於て発達し、クロネッカー、ウェーバー、ヒルベルト等に依つて研究され、近時更にフェーター氏頻りに之が研究を發表してゐるが、其術迂濶であり、而も往々誤謬あり、到底我が高木博士の明快徹底せる所論に及ばざること遠い感がある」

この項目を書いたのが誰かは不明だが、情報提供者は高木の論文を読めたらしい。

1920年、天文学科3年の萩原雄祐は卒業論文を執筆中に、類体論執筆中の高木を目にしている。「数学の図書室で数学の論文を読みはじめたのは私たちが最初であつたらう。研究室では高木先生が

一本の指でタイプを打っておられた。これが有名な代数体論の論文である」

高木の類体論論文執筆に関する目撃者証言は、これ以外存在しない模様である。

高木の一番弟子と言うべき末綱愨一(1922年3月東大数学科卒)は、「私が大学1年生のとき、先生はこの偉大な論文の原稿を書きまとめておられたのであるが、われわれ学生はそんなことには全く気がつかなかった」と証言している。高木と類体論について親しく語り合った最初の日本人である末綱も目撃しなかったことになる。

吉田洋一(1923年3月東大数学科卒)は、当時の高木を描写している。高木の遅刻に関する最初の目撃証言となる。

「聞くところによりますと、先生は夕食後七時半くらいに寝られ、十一時半頃起き出され、朝の四時半頃まで研究や勉強をされて、それからもう一度寝られて、九時頃朝食をとって、大学に来られたそうです。

多分そのためでしょう。先生はたいてい時間に三十分くらい遅れて来られ、うちから着てきた外套のまま教室に入られて、それを脱ぐと、ポケットから手帳を出して、講義を始められました。正味十分あるかないかの講義なんですけれど、非常に早く進むんです」

北川敏男(1934年3月東大数学科卒)は、「高木先生だって、「類体論」を書くためにはどれだけ例をおやりになったかわからんくらいだと先輩からうかがったことがあります。先生のお話では、すぐ例が出てくるんです。計算などもじつにスマートでしたね」という証言を残している。末綱以降、正田建次郎(1925年3月東大数学科卒)、竹田清(1926年10月東大数学科卒)、黒田成勝(1928年10月東大数学科卒)・彌永昌吉・守屋美賀雄(1929年3月東大数学科卒)といった高木の論文内容を解する代数学者が現れてきたのである。

ここまでの議論には、高木が海外に投稿した論文が過去にリジェクトされていないという大前提があることは特記しておく。

類体論発表当時の高木

高木は1920年5月7日に「欧米各国へ出張ヲ命ズ」(文部時報1920年6月1号より)という辞令を受けた。1920年7月8日に阿波丸で神戸を出港したが、類体論の研究が完成したから出張を命じられた、ということではないと見られる。高木と同時に同辞令を受けた東大教授呉秀三は「聯合國神經学会議ニ参列ヲ命ズ」という別命を受けたが、高木はICM参列を命じられなかった。

欧州派遣に高木を推薦した側が類体論を適切に評価できたとは思われず、消去法で選出されたものと判断される。事実、高木の恩師である藤澤利喜太郎は東大理学部長事務取扱として、高木と同期の吉江琢児は東宮御学問所御用掛として東京を離れられなかった。代数学教授の高木は、十名程度の東大数学科学生(1~3年全員)への講義以外の負担が無く、物理学科・天文学科との共通講義、また工学部等に数学の講義をすることもなかったので、手が空いていたのである。

とはいえ、代数学講座に助教授はおらず、休講は不可能である為、人事措置が必要となる。最初に高木が1920年7月20日に東京帝国大学理学部数学科数学第三講座担任を免じられ、夏休み明けの1920年8月18日に東北大学の藤原松三郎(1905年7月東大数学科卒)が東京帝国大学理学部数学第三講座に属する職務を担任、1921年4月30日に藤原は東京帝国大学理学部講師の嘱託を解かれ

ている。高木の代行で代数学を担当する適任者が、国内には藤原しかいなかったのである。当時、国内の代数学者は高木・藤原・京大の園正造しかおらず、園はパリ滞在中であった。

阿波丸には新聞記者・柳澤健と早稲田大学の社会学者・關與三郎が同乗した。8月下旬頃マルセーユに到着し、9月25日のICM1920で論文を読み上げた後、ドイツに渡り1921年5月13日に帰国している。

九州帝国大学の成瀬正一の紹介でパッシイ区の閑静な素人下宿に移り、高木と同宿した柳澤の回想を引用する。柳澤は詩人として知られることになる人物である。

「同船の日本から遣つて來た者が三人ほど一緒――自分の他には、帝大の數學教授の高木貞治と早稲田に社會學を講じてゐた關與三郎とこの二人だつた。高木博士とは翌春伯林に行くときも一緒だつたが、數學者の癖に文學にも詳しく、いつぞやモーパッサンの紀行文『水の上』のことを言ひ出したところ、彼にはこの他にモロッコ地方を描いた紀行文があると言つて、逆にこつちが教へられるような始末だつた。伯林行の寢臺車のなかで、自分が持つてゐたロマン・ローランの『ダントン』を最後の頁まで綺麗に讀み終つたのも彼氏なら、『君のやうな仕事をする人間が英語と佛語としか出來ぬでは困る。是非獨逸語の新聞位は讀めるやうになりたまへ』と、『ベルリナー・ターゲブラット』か何かの社説に眼を通しながら、側にゐた自分に一本痛いところを浴びせたのも彼氏である。その代り、活動寫眞と言へば眼にチカチカする、雨降りの代物と許り心得てゐた彼氏の厭がるのを無理にパッシイの映畫館に誘ひ出して、爾來先方からこちらを誘ふやうにさせたのは、自分の手柄であつた。……」

ストラズブルクのICM1920に参加するまでの高木が何をしていたかは本田教授の著作に譲るが、当時のフランスには日本人数学者内藤丈吉(1906年7月東大数学科卒)が永住しており、接点を持った可能性がある。内藤は、東大卒業後に第一高等学校教授となり、官費でパリに留学したが、現地でフランス人女性と結婚し、帰国することなくパリに永住したことで新聞沙汰になった。願により第一高等学校を辞した後は、土産物屋“宝の山”を営みながらパリ在住の日本人と親しく交流したので、在仏日本人芸術家の回想には屢々登場する。

帰国後の高木は、末綱に類体論論文の別刷を与えたが、末綱には当初読めなかったという。末綱は高木の勧めでLandau「代数的数とイデアルの基本的並びに解析的理論への入門書」(1918)を読み、解析的整数論に向かった。

ここで疑問が生じる。高木自身は1920年に類体論の論文をHilbertに送付し、1925年か翌年に、類体論の論文を詳しく読んだのでMath. Ann.に転載再録したいというHilbertからの手紙を受取ったとしている(高木は断った)。1920年以前に論文を送付しなかったのかは何故であったかが問題になる。

ICM1920で類体論が評価されなかったのは、ICMがドイツやオーストリアの数学者を締め出したことに基因する。であれば、大戦終結後直ちにHilbertやLandau等のドイツ系整数論研究者に東大紀要別刷を送付すれば、状況は変化したのではないか。適切な査読者を探さなかった背景はどのように説明されるか。送付した上で無視された可能性は否定できないし、誤った可能性がある証明を送付する勇気がなかったかも知れないが、現在となつては確認できない。実際、高木はゲッチンゲンで博士号を取得せず、国内に代数学者がいない状況もあつて、確認される限りでは査読による批判を受けることは

なかった。前もって送付しておけば、1920年の渡欧はもう少し華やかなものに成り得たが、他のドイツ数学者が問題を解決する可能性も高くなっただけである。

明確に言えることは二点ある。①ICM1920ですら評価されずに帰国した高木は身近な読者となる末綱を能力育成し、②類体論以降も査読付論文を執筆しなかった。

1939年12月、高木は讀賣新聞記者に類体論の内容を聞かれ「私の専門は数学といふ學問で、しかもその全部のうちの一部を完成しただけでこれを類體論と言はれてゐる。これで數論中の大問題が次々と解決されたことは本當だ。ですが、その理窟は一口には言へません。詳しく言つても素人には判りません」と、笑って応じず「私のは殊に純理論だから、それが世界の人類にどれだけ効果があつたなどともいへません」と語っている。類体論発表当時、多くの数学者が適切な理解を成し得なかったものを、記者に理解させるのは絶望的であろう。

隣人寺田寅彦と高木貞治

小石川区曙町に居を定めた高木は、1918年に隣人として東大物理学科教授の実験物理学者寺田寅彦を迎えた。曙町の高木が居住する一角は、Teiji TAKAGI, Torahiko TERADA, ドイツ文学者友枝高彦 Takahiko TOMOEDA, 物理学者田丸卓郎 Takuro TAMARU が居住したことから、T・T横丁として学生に呼称されていた。寺田の日記から高木の記述を拾う。

日付・曜日・天気	文面
1915年12月15日 水 晴	夜数物理講演会、高木教授の「群に就て」あり
1915年12月18日 土 晴	風強し。午後数物例会、高木教授の講演五分位にて終る。珍らしき短時間の集会なりし
1917年6月9日 土 雨	午後田丸先生と曙町の屋敷を見に行く。高木氏の隣家なり 二百坪にて小き貸家五軒あり 三千五百円との話なり
1918年2月24日 日 晴	朝陟来る。曙町より電話かゝり、高木氏との境界設定につき立合ひくれとの事にて行く。高木氏は不在故明日迄決定を延期す
1918年2月15日 火 曇	朝曙町に行く 竹村に逢ひ、同道す。外圍板塀の台石水盛りをなし坐敷の下見も張り始めたり
1918年4月14日 日 曇後晴	朝より書齋の整理にかゝる 屋前浜口兄上り、続いて高木氏、田丸先生、津田青楓君来る。津田君よりは屏風を貰ふ、津田君と夕食 夜十時頃迄話す
1918年4月16日 火 曇後晴	留守中高木氏夫人来り京焼菓子器を貰ふ
1918年4月21日 日 晴	朝三越に行き夏目家婚儀の御祝に鯉節の折を注文しそれより早稲田の御宅を尋ぬ、兄君のみ在宅未亡人御子方は浮間原へ桜草取に行かれし由なり、門前にて津田君夫人に会ふ。掃りに一寸高木氏へ寄り先日の礼を述べ
1918年7月6日 土 曇後晴夜驟雨	朝高木氏を訪ひ明後日山崎氏と二人晚餐に来て貰ふよう依頼す
1918年7月8日 月 曇	夜高木山崎両氏を招き晚餐
1918年8月16日 金 晴	午前母上しんと高木、田丸、木下三家へ挨拶に行く
1918年8月18日 日 晴驟	朝ノート作る。屋前高木氏来訪 大蔵経の話などす

雨	
1919年1月25日 土 雨少 雪	しん髪結に行き紅谷にて菓子を求め高木、田丸両家へつとめに行く
1920年4月8日 土 曇後 晴	二階から見ると方々の桜が咲いて居る。高木さんの八重も大分咲きかけた、何処かの白木蓮が美しい、うちの庭では丁字、椿、連翹が咲いて居る、楓も一本は大分若芽が出た、バラも新芽を吹き出した
1920年7月3日 土 晴	二階より高木氏方書斎の屋根を見下したるスケッチを始め
1920年7月4日 日 晴 夜 雨	朝二階の絵、佐瀬君中元の砂糖持参、高木氏来訪 十日神戸発の船にのる由、午後タイムス、イリュストラシオンなど読む
1920年10月12日 火 曇	午後しんを丸善にやり Howes Insect Behavior を求めしむ、13. 20° 序に高木田丸木下へ勤めに行かしむ
1921年1月17日 月 晴後 曇	しん高木田丸両家へ年賀に行く
1921年5月15日 日 晴	朝高木氏へ帰朝のよろこびに行く
1921年5月16日 月 晴	高木氏来訪 レラチゼティに関する各種パムフレット借用す
1921年9月11日 日	午前高木氏訪問 借用のパムフレット返却
1922年1月5日 木 晴	しん高木さんへ年始
1923年1月20日 土 曇 無風	朝気象実習。昼飯の時山崎直方氏に逢ふ。昨日帰朝した由。南米談を聞く。ドクター、ペーアマンが今伯林で全盛だといふ話。ペンクが益々盛で日本人にも相不変親切といふ話など。午後数物例会、高木さんと武内君講演
1923年9月2日 日 曇	朝学校へ行く、門で木内君に逢ふ。友枝、田丸、高木三家へ挨拶に寄る

ここで“しん”とは寺田寅彦夫人，“山崎”とは地理学者山崎直方である。高木家と隣人寺田家は、主人同士の間際が稀薄なことが伺える。少なくとも醤油の貸し借りをするような関係ではなかった。1930年代後半の高木邸の応接室には古ぼけたピアノがあったという証言があるが、寺田が隣家から流れるピアノの音を聴いたという記述もない。高木自身も、寺田に言及した記録はなさそうである。

興味深いのは、類体論講演から帰国後、寺田が高木から相対性理論に関する文献を借り出し、四ヶ月手許に置いた点である。アインシュタインがノーベル物理学賞を受賞するのが1922年11月10日、神戸上陸が11月17日、離日が12月29日である。高木が相対性理論を読む背景は、アインシュタイン来日とは連動していない。以後、寺田が高木氏から高木さんと呼称を変化させている点は意味深である。気安い付き合いになったのであろうか。

1921年5月16日、寺田は小宮豊隆に葉書を書いている。

「独逸で出た相対原理に関するいろんな小冊子を近頃西洋から帰つた人に借りる事が出来たので奮発して読み始めました。アインシュタインの1916の論文が此れでやつと見られる」

高木は1908年の日本天文学会創設当時の学会員で、天文学の大学院生萩原雄祐にLichtensteinによる回転流体の平衡形状の論文を貸与したくらいであるから、最初から天文学に広汎な興味を持って居たかもしれないが(学生時代の高木は天文学の講義を受講していない)、相対性理論が流行して

いたパリ生活の影響かもしれない。高木は 1935 年頃には Hilbert 空間に興味を持ち談話会で話したことがあるといい、物理に興味があったのかもしれない。ここで寺田が言うアインシュタインの 1916 年の論文とは「一般相対性理論の基礎」・「量子論による輻射の放出と吸収」である。東大物理学科の蔵書に無かったのであろうか。

高木と天文学の関係語る最適任者は、次女の娘婿に当たる観測天文学者及川奥郎(1920 年 7 月東大天文学科卒)であるが、この種の証言は発見されていない。

類体論以後の高木の国際的評判

ドイツ語圏の数学者が殆んどオミットされた ICM1920 では反響が乏しかった類体論であるが、ゲッチンゲンを中心に高木の国際的評価は一変した。最初の可視化された反響は、1923 年 1 月にチェコスロバキア数学物理学会名誉会員に推薦された件である。日本人数学者が国際的な顕彰を受けたのはこれが最初であるが、一般には知られなかったものと見られる。

同年、高木の論文を Helmut Hasse が精読した。1962 年 9 月に本田欣哉がハンブルク大学で Hasse にインタビューした内容を挙げる。

「私が高木貞治教授の類体論の論文のことを知ったのは、一九二三年にハンブルクで、アルチンにすめられてでした。

私は第一論文を読むのに、数週間を要しました。その一般性、その明晰さ、効果的な方法とおどろくべき諸結果とに、深く魅惑されました。第二論文からは、さらに強いインスピレーションを与えられました。

二年間ほどかけて、私は教授の二論文を徹底的に分析究明しました。そして、私自身の方法で整理をしまして、証明もより明快にしていきました。このようにして、今や完全に高木教授の理論を把握できたという自信を得てから、私はドイツの数学者たちに対し、講演を行い、総合報告を発表しました。青年期の私にとって、もっともすばらしい「精神の高揚」をおぼえたものでした」

1925 年 6 月 27 日、高木は帝国学士院会員の大量補充時に会員となった。単なる数学教科書の著者で終らなかつたことで、吉江琢児より学界(特に藤澤)の評価が高まったからであろう(吉江は 1927 年 11 月 1 日に会員となった)。幾つか証言と公文書記録を拾う。

1926 年 7 月に欧州に出張し、主としてベルリンに滞在し、1927 年 1 月 17 日に帰朝した東大理学部教授竹内端三(1910 年 7 月東大数学科卒)の証言。

「数学の教授も多いし互に勵みあつてゐるが、一體に、ゼオメトリーの専門の方が多くアルゼブラの方は少くこの方面では日本の方が遙に勝れここの高木教授等は有名なもので、あちらで評判は非常に高い」

1927 年、中山忠直「漢方医学の新研究」(寶文館)がベストセラーとなった。詩人・漢方医として知られる中山は、付録部分に日本科学界についての総説記述をしている。数学界については、大日本文明協會編「日本の科学界」(大日本文明協會事務所)の記述を完全に剽窃しているが、一般大衆向けに「虚数乘法の高木」という側面を紹介した最初期の文献である。

「楕圓乗法に一步を進めた虚數乗法は、現に日本が世界一である。この学問は十九世紀の後半に發達したもので、クローネッカー、ウエバー、ヒルベルトによつて研究され、近來フェーターがヨーロッパの覇者であるが、彼等はみな我國の高木貞治博士に及ばぬ。フェーターの最近の論文の如きは、その方法が迂遠で往々誤謬があつて、とても高木博士の明快徹底的なるに及ばぬのである」

1929年4月にオスロ大学より Abel 没後 100 年を記念して名誉博士の学位が授与された。アジア歴史資料センター(レファレンスコード B04012194100)で閲覧できる外務省資料「外国学校関係雜件 第一卷 13. 諸威国 (2)オスロー大学」を紹介する。●は判読不能文字である。

電信寫 ストックホルム 二日後發	本省 三月三日前着
田中外務大臣	武者小路公使
「オスロー」大學ハ四月六日諾威數學者 Abelノ百年祭ニ際シ東京帝大理學部高木貞治教授ニ名譽博士ノ稱號ヲ贈ルコトニ決定シ Guldberg 教授ヨリ直接同博士ヘ通報濟ノ趣ヲ以テ同大學ヨリ高木教授右祭典參列ノ有無照會越セリ就テハ同教授ノ意向御回電請フ	

公信案 外務省文書課長 花押	淨書 伊藤 認印	校正(原稿) 木原 認印 (淨書) 木原 認印
文書課發送 昭和四年參月四日發送濟	起草 昭和四年參月四日	
主管 歐米局長 花押	主任 第二課長 認印	
歐二普通第一六五號	昭和四年參月四日附	
受信人名 栗原文部次官	發信人名 吉田次官	
件名 諾威「オスロー」大學祭典ニ東京帝國大學理學部高木貞治教授ノ參列ノ有無照會ノ件 本件ニ關シ在瑞典武者小路公使ヨリ別紙寫ノ通り電報アリタルニ付同教授參列ノ有無至急添回示●願度シ(別紙在瑞典公使●電第二五号寫添付) 備考:電信欄外に同月6日付で「高木博士へ電話ニテ通知濟 尚電信寫送付スミ Y. O.」との記入あり		

文部省官專九五號	
昭和四年三月十三日	文部次官 栗屋 謙 公印
外務次官 吉田 茂殿	
諾威「オスロー」大學祭典ニ東京帝國大學理事部高木貞治教授ノ參列ノ有無照會ノ件 標記ノ件ニ關シ本年三月四日付歐二普通第一六五號ヲ以テ御申越ノ次第ニ對シテハ早速本人ニ照會致シタル處右「オスロー」大學祭典ニハ都合ニ依リ遺憾ナカラ參列致シ難キ旨回答有之タルニ付此ノ旨先方へ通達方御取計相煩度此段御依頼ス(終) 備考:「歐米局」「第二課長」のスタンプ印及び認印 昭和四年參月拾四日接受のスタンプ印あり	

電送第 2507 號 昭和 4 年 3 月 15 日後 1 時 45 分發	
電信案 外務省電信課長 認印	起草 昭和四年三月一四日
主管 歐米局長 花押	主任 第二課長 認印
件名 諾威「オスロー」大學祭典ニ東京帝國大學理學部高木	平 第一八號

貞治教授ノ参列ノ有無照會ノ件	
宛 在瑞典武者小路公使	發 田中大臣
貴電第二五号ニ関シ	
高木貞治教授ニ照會シタル處都合ニ依リ遺憾ナガラ参列シ難キ趣ナリ	

計算すると判るが、武者小路公共駐スウェーデン公使が発電した1929年3月2日に高木が日本を出発したとして、オスロに到着することは事実上不可能である。武者小路公使の電信から推定されるが、Guldborg は高木に前もって通報している。その上で、高木は手遅れになるまで回答をしなかったと推定される。理由はわからない。

もう一つ言うと、1929年3月4日に外務省から通知を受けた文部省が、「本人に早速照会」した結果を9日後の同月13日に外務省に回答したのは異常である。文部省に対する高木の回答が遅れたのではなかろうか。外務省は文部省から即日回答が無かった事から、同月6日に文部省の頭越しに高木に電話通知したと見られる。

名誉博士号授与については東京朝日新聞で記事になり、高木のコメントも寄せられている。

「アーベルは、文學方面におけるイブセンと共にノールウエー人が誇りとする偉人で年齢僅かに廿七歳で死亡したが、四五年間の短い間に數學上の各方面に畫時代的の業績を擧げ數學史上から他に類のないといつて良い」

1930年9月にゲッチンゲン大学に留学し、Hilbert 退官最終講義を聴いたという学習院教授古賀軍治(1925年3月東大数学科卒)の証言。

「獨逸國內では勿論各國で我國の高木貞治先生の評判は大したものである。ランダウ教授は「日本數學界の神」であると云ふ。ベルリン大學のシュア教授は講義の時高木先生の名前を出すときには必ず「有名な日本の」と云ふ形容詞を附けると云ふ事である。曾て高木先生はヒルベルト教授に就いて學ばれた事があるので、獨逸人は高木先生はヒルベルトの生徒である、然も弟子中の第一人者であると云ふ。これは獨逸人としては非常の褒め方であらうと思ふが、同時にヒルベルト教授に對してはこれによつて極端な誇りを感じてゐるらしいのである」

古賀は Hilbert 退官最終講義を感動的に描写しているが、Hilbert はゲッチンゲン大学を退官後も講義を続けており、物性物理学者有山兼孝は1933年6月に Hilbert の真の最終講義を聴講している。

「それはただ、そのゼメスターの最後の講義で Hilbert がこれでもってもう退職するんだという、普通のカリキュラムにある講義の 最終の時間であつたというだけのことであります。別段格別のこともない、普通の通りの講義をされました。最終講義とも何とも出ておりませんでした。ただこれが最後の時間なんだということをみんなで話し合つて、感銘深く聞きました」

1935年5月、国語学者澤瀉久孝が某中等学校の国語科教授研究会の席で話した内容。

「最近知人よりの消息によりますと維納には日本語を研究してゐる一團の學生があつて、その一人は本多光太郎博士の物理學の著書を読む爲であり、またある一人は高木貞二博士の數學の書を読むためであるといふやうな事を聞きました」

高木の「初等整数論講義」(1931),「近世数学史談」(1933)を読みたい外国人がウィーンにいたのであろうか。ウィーン大学に日本学研究所が創設されるのは1938年のことである。

かくも海外の評価が可視化された日本人数学者は、高木を初とする。国内で読者に恵まれなかった高木の論文は、国外からの評価が届くようになって、国内評価が高騰したのである。

高木の第三次洋行

1932年4月15日、学術研究会議総会でチューリヒ ICM1932 に高木派遣が決定された。アジア歴史資料センターで閲覧できる外務省記録「国際数学者會議關係一件」(レファレンスコード B04122543100)を紹介する。

外務省文書課發送 昭和七年五月廿五日發送済	起草 昭和七年五月二十三日
主管 欧米局長 署名	主任 第二課長 岡本季正印
歐二普通第五四六號	昭和七年五月廿四日附
受信人名 粟屋文部次官	發信人名 有田次官
<p>件名 「チューリッヒ」ニ於テ開催ノ萬國數學者會議ニ本邦代表者出席方ノ件</p> <p>今般在本邦瑞西公使ヨリ本年九月四日ヨリ同十二日迄同國「チューリッヒ」市ニ於テ開催セラルヘキ萬國數學者會議ニ同會議組織委員會ニ於テ本邦代表者ヲ招請スル旨ヲ以テ別紙写ノ通申越タルニ付委曲右ニテ御了知ノ上何分ノ儀御回示相成度(別紙在京瑞西公使來信第二二号写一通作成添付シ同附書ハ一括其●添付●)</p>	

外務省文書課發送 昭和七年五月廿五日發送済	起草 昭和七年五月二十三日
主管 欧米局長 署名	主任 第二課長 岡本季正印
歐二普通第二三號	昭和七年五月廿四日附
受信人名 在本邦瑞西公使トラベルシニー	發信人名 芳澤大臣
<p>件名 「チューリッヒ」ニ於テ開催ノ萬國數學者會議ニ本邦代表者出席方ノ件</p> <p>以書翰啓上致候陳者本月二十日附貴翰第二二号ヲ以テ本年九月四日ヨリ同十二日迄貴國「チューリッヒ」市ニ於テ開催セラルヘキ萬國數學者會議ニ同會議組織委員會ニ於テ本邦代表者ヲ招請スル旨御申越相成敬承致候右ハ早速●係官處ニ移牒致置候條右様御了知相成度此段申進●本大臣ハ茲ニ重テ閣下ニ向テ敬意ヲ表シ候敬具</p>	

<p>欧米局第二課長 岡本季正印</p> <p>官專一九四號</p> <p>昭和七年五月三十日</p>	<p>昭和七年五月卅日接受</p> <p>文部次官 粟屋謙 次官公印</p>
<p>外務次官 有田八郎殿</p> <p>「チューリッヒ」ニ於テ開催ノ萬國數學者會議ニ本邦代表者出席方ノ件</p> <p>標記ニ關シ本年五月二十四日付歐二普通第五四六號ヲ以テ御照會ノ趣了承右會議ニハ本邦學術研究會議ヨリ代表委員トシテ左記一名ヲ參列セシムルコトニ決定致シ居レルニ付御了知相成度此段回答ス</p> <p style="text-align: center;">記</p>	

東京帝國大學教授 理學博士 高木貞治

文書課發送 昭和七年六月參日發送済	起草 昭和七年五月三十日
主管 歐米局長 署名	主任 第二課長 岡本季正印
歐二普通第二四號	昭和七年六月貳日附
受信人名 在本邦瑞西公使トラヴェルシニー	發信人名 齊藤大臣
件名 「チューリッヒ」ニ於テ開催ノ萬國數學者會議ニ本邦代表者出席方ノ件 以書翰啓上致候陳者本年九月貴國「チューリッヒ」市ニ於テ開催セラルヘキ萬國數學者會議ニ本邦代表者参加方ニ●シ五月二十四日附歐二普通第二三號ヲ以テ一應回答申進致置候處今般文部省ヨリ同會議ニハ本邦學術研究會議ヨリ代表委員トシテ東京帝國大學教授理學博士高木貞治ヲ參列セシムルコトニ決定シ居レル旨回答越タルニ付右御了知相成度此段申進●本大臣ハ茲ニ重テ閣下ニ向テ敬意ヲ表シ候敬具	

駐日スイス公使宛の発信者が外務大臣芳澤謙吉から総理大臣兼外務大臣齋藤實に代わっているのは、五・一五事件で犬養内閣が倒閣した結果である。

高木は7月12日に神戸を出港、12月3日朝、欧州航路鹿島丸で神戸に帰国した。過去に紹介されていない証言を引く。

同年4月、帝国大学新聞のインタビューに答えて、

「高木教授は語る

私が行くことになりましたがまだ出発の日取りもきまらずどんなことになるかわかりません歸りは十一月頃になるでせう」

ICM1932に高木を派遣する決定は4月になされていたが、この決定がスイスに伝わっていなかったので、5月下旬になって誰を派遣するか問合せがスイスから届いたわけである。学術研究会議が国際電報料金支出を渋ったか、学術研究会議数学部長の高木が手紙を書くのを忘れていたのであろう。恐らくは後者が主因だと考える。

Helmut Hasse の証言。

「残念ながら、私が直接高木教授にお会いできたのは、一度だけでした。一九三二年、チューリッヒにおいてです。しかし教授は私を、ネーターさんなどと一緒に、ホテルでのディナーにようございました。「偉大な数学者」という印象を受けました。思えばなつかしい、楽しい一タでした。チェボタリョーフ教授と、いろいろ冗談を言い合ったりしたのをおぼえています。彼は大戰中ロシアの陸軍に、私はドイツの海軍に入っていました。つまり、敵同士だったんです。それで話がはずんだのでした」

高木は、宿泊したホテル・エーデンの特別室に Nikolay Grigor'evich Chebotaryov, Amalie Emmy Noether, Hasse 等類体論に関係が深い6名の数学者を招き、一タの宴を催したということである。

Hasse は末綱と共著論文を書き、パリに留学していた彌永昌吉と直接の面識を持って居た。末綱・彌永は Hasse を当初“ハーセ”という呼名で言及しているが、高木は一貫して“ハッセ”と記述し、最終的には末綱・彌永共に“ハッセ”と書くようになった。“ハーセ”が正しい発音だというが、この宴で高木は Hasse をハッセと呼んで通し、Hasse も敢えて訂正しなかったのかも知れない。一貫して Helmut と呼ん

たので気付かなかった可能性は0だと思うが。

高木による1953年の回想。

「パリに行った時には、わたしのフランス語では、逆も芝居は無理だから、ついオペラへ行ってみる事になった。成るべくは、オペラ・コミックで、カルメンか、パタフライかをやっているとよかったのだが、そうばかりも行かないで、グラントペラへも行かねばならなかった。何分プルニエあたりで、食事をしてから行くのだから、音楽を聞いている中に、心持よくなって、睡む気がさすのである。最後の洋行、といっても二十年前なのだが、歸りの船で、あの話を安藤さんにしたらば、「マア、勿體ない」といわれた。ワグナーを聞きながら、居眠りをする野蠻人の冒瀆を歎かれたのであろう。あの年わたしはヴインで、先輩の數學者フィリップ・フルトウエングレーを訪ねた。「君、若し音楽が好きなら、近日僕の從兄がこちらへやって来るから……」と言われたのに、「イヤ僕は音楽は分らないから」と、すげなく、その話を打切ったが、實を言えば、あの時わたしは音樂家フルトウエングレーの存在を知らなかったのである。あの年ヴインで、音樂のコンクウルか何かがあつて、安藤さんも、そこで出られて、フルトウエングレーの指揮振りを鑑賞されたのであつたそうだ」

安藤さんとは、同年6月ウィーンでの第1回国際コンクール審査員として渡欧していたヴァイオリニスト安藤幸子(幸田露伴の妹)である。歸りの鹿島丸には、安藤の他帝展の佐分利眞・長谷川昇画伯、巴里で油絵を勉強した武内満佐子、体操選手大谷武一が同乗していた。安藤は高木と同時期にドイツ留学した過去があり、面識があつたかもしれないが、安藤自身は高木との交流を記録していない。

同年12月帰国後、帝国大学新聞のインタビューに答えて。

「今回の總會は九月十一日開催主な議題は協會規則改正であつたが緊急に撤回され同時に同協會は解散して眞に國際的な協會を作る事が決議された、これは從來の協會はいはば世界大戰後の聯合國側のみの協會でドイツ、オーストリアを除外してゐたので今度からはドイツ、オーストリアを含めた眞に國際的なものを作らうといふ事にあるのです然し今回の會議も相當國際的なもので、四十一ヶ國からの代表者が来てゐました、次回は一九三六年ノルウエーのオスロで開かれますが、この次からは會議毎に新進のもつとも學問的に功績ある者二名に賞牌を授ける事になつた、審査員は萬國數學會議員たる(ドイツ)カラテオドリ氏(イタリー)セウリ氏(佛)カルタン氏(米)バーコフ氏及び私であつて日本の若い學徒も勉強してこの賞牌を受けて呉れる様になつたらいいと思ふ……」

排除されていたドイツ系數學者が復権する状況を高木は描写しているが、この種のコスモポリタリズムに関する表現は消えていくことになる。1933年1月30日にナチスが政權獲得し、4月7日に公務員制度復旧法を布告してユダヤ人と反ナチスの科學者を追放し始めたのである。數學者にとって、四色問題以上に深刻な國境問題が現出しつつあつた。

高木貞治と數學史

高木は1933年に「近世數學史談」を刊行した。辛辣な書評が横行する科學史業界だが、同書を痛烈に批判した論者は皆無である。それだけの労力を投入した成果であるが、いつ頃から同書執筆の為の知的蓄積をしていたのかは明らかではない。歴史學者や科學史家との知的な接觸も、小倉金之助を

除いては見当らない。文献を個人的に蒐集していたことは間違いないが。

高木が数学史に初めて言及したのは、確認される限りでは東大数学科・星学科・物理学科 2 年生が幹事となり 1901 年 12 月 25 日に開催されたニュートン祭である。この日、高木の講演・ニュートン祭創立者の一人隈本有尚による講演「人物に就て」、長岡教授・本多学士によるニッケルスチールの磁場に伴う容積変化の幻燈、本間学士による単一弦運動の組合せを示す新案装置が披露された。当時の記事は以下の通り。

「六時幹事開會を報じ高木貞治氏演壇に現われたり氏新に獨國より歸朝して未だ一閱月ならず滿場の注意は氏に集まれり氏は徐に口を開きて「インフインテシマル、カルキュラス」の歴史を概論すニウトンが之を窺めてより雜然として起れる諸家の研究が輓近の學者の批評的態度に至る迄其間實に二百有餘年然も問題の範疇の常に根本に歸るを免かれ得ず年々に出づるリテラツールの量に比較して學術の進歩が質に於て極めて徐々たるを見れば顧みて之を創始せるニウトン其人の偉大なるを仰いで轉た崇拜の道理なるを覺ゆと結ばれぬ急霞の如き拍手一たび過ぎて復起れり」

次の場面は、東大数学教室談話会で行われた東京高等師範学校教授林鶴一との対話である。杉村欣次郎(1912年7月東大数学科卒)は、在学中の談話会の風景を証言している。

「林氏は声の高い気焰家で、高木貞治先生とギリシア人は無理数を認めていたか否かについて論じた」

1919年6月23日の東京朝日新聞紙上で、高木は東北大理学部長に内定した林鶴一について以下のコメントを残した。

「林博士は日本数学史の研究で最も聞え夫に關する著書もある。頗る快活な人であつて又敏腕家だから部長として適任者だと思ふ」

次は、細井滄(1926年3月東大数学科卒、和算家細井寧利の孫)に対しての助言である。

「細井滄は東京大学の学生の時に高木貞治に次のようにすすめられたという。「細井の家は代々和算の家だという。和算史の研究はだれかがせねばならないから、君がやってみないか。」高木のすすめで細井滄は和算史の研究へ進んだ。細井が三上に教を乞ひに行ったのは、高木の紹介状をもつてのことらしい。細井はその前に何か論文を書いたことがあるらしいが、三上はその論文について初対面の細井を手ひどく叱りつけたらしい。「主人がすっかりしよげて帰ってきたので、私が何日かたつたあと、三上先生のお宅へご挨拶に行きました。」細井滄夫人(弘子)の思い出話ではあるが、細井夫妻はもうこの世にいない人たちである」

その学説故に1923年12月に帝国学士院和算史調査囑託を解囑された三上義夫だが、高木は紹介状を書いたことになる。三上自身は、和算史家・通俗科学史の著者を始めとして実に多くの人間を、格調を欠く表現で批判対象にしているが、高木の近世数学史談を批判対象にしたという記録は今のところ見当らない。

1929年に東大数学科入学(後中途退学)の遠山啓の証言。

「ぼくが東大にいたとき高木(貞治)さんの講義を聞いておもしろいと思ったのは、あの先生の講義が大體アンチヒロイズムなんだ。偉いと思っていた人を身近な人間にしてしまう。たとえば集合論の話のこと——ツェルメロの選択公理の証明に二種類あって、あれは結局同じなんだ。なぜ同じようなものをツェ

ルメロ先生がやっているかという、論文をたくさん書きたかったからだ……(笑)。そういう点がぼくは非常に印象に残っているんだけど……」

林鶴一が1935年10月4日に狭心症で没した件について帝国大学新聞同月7日号でのコメント。

「東大理學部數學科高木貞治教授は暗然として語る

前から心臓が悪いときいて心配してゐたが快くなつたらしく高等學校の授業視察に行かれたとかいふので安心してゐた所だつたのに……僕が林さんと知り合つたのは第三高等中學校時代のこと、東大でも一緒だつた林さんは明治三十年に學校を出てから京大へ行き「坊ちやん」で有名な松山中學へも行ってゐたことがある、それから東京高師、東北大と轉じたが三、四年前東北大も引退した、林さんの性質は、數學者らしい良く切れる性格だつた、和算の研究は一般にも有名でたしか「免許」をもつてゐた筈、二年程前物理學會で會つたきりだが、思へばあれが最後だつた……」

林が伊達伯爵家から関孝和著“關算四傳書”を借り受けたまま退官し、数学教室に所蔵されていたのが再発見されたことを受けての帝国大学新聞同年11月25日号でのコメント。

「東大理學部高木貞治教授談 それは初耳だ、和算の方面のことはよく判らないけれども關孝和の時代に既に行列式や微分方程式がある程度まで使はれてゐたことなど仲々興味あることだと思ふ」

1957年の和算に関するコメント。

「和算家にきくと、証明なんというものを知らないんだ。こうだ、というんだ、自分が、何べんきいても、言葉は変るけれど、主張するだけでね、それで間違えてはいないんだね。実際の数にあてれば、ちゃんとだすんだがね。ちょっと言えないんだ、わけが、だけれど、そうむちゃくちゃを言うんじゃないから」

「和算家と話すると、こっちはちつともわからないんだ」

高木は、ゼミ等で数学史を講じることはなかったが、かなり初期から興味はあつたらしい。高木の数学史の著作は、一般人の読者を多数獲得する契機となつた。

高木と帝国大学新聞

帝国大学新聞は、高木から一番多く生のコメントを得たマスメディアである。高木のコメントを拾う。

藤澤利喜太郎博士の死没に当たつての1934年1月のコメント。

「數學界の恩人 高木貞治氏談

先生は本邦における大學數學教育體系の創始者で日本の數學者にして先生の直接間接教をうけないものはないといつて過言ではあるまい應用數學も先生が開拓創始されたもので明治二十九年には法科で統計學の講義を擔當され、生命保險の數理的基礎を確立されたのも先生であつた」

「初めは英國(ロンドン)にゐられたが間もなく獨逸に轉じ、ベルリンと當時新興のストラスブルグとで勉強して、同二十年に歸朝された。先生があつた時のベルリン大學の數學を見て來られたことは日本の數學の爲にどれ程幸福であつたか知れないと思ふ。若しもあつた時英國ばかりに留まつて歸朝されたならば、偏狹なる數學が日本の大學に植え付けられる危險が充分にあつたであらうと筆者は常に考へてゐる。一八八〇年代のことだから、日本でも歐羅巴でも、今とは事情が大分違ふ」

高等学校文科数学教育改革に就いての1935年12月のコメント。

高等学校文科の数学は1923年文部省訓令で第1学年中に約90時間、代数と幾何の補充・三角法・平面解析幾何・微分積分を教授することが規定されているが、相当の改善余地があるので、文部省は全国高校の数学科教授を集めて数学講習を開くこととし、高木・吉江・田邊を講師に招くことになった。

『論理の實習』も一つの方法 東大教授高木貞治博士談

高校文科の数学は従来文科生徒間に興味が少なく従って擔任教授としても氣乗がせずしかもその盛澤山な教授要目は一年毎週三時間では到底不可能であり、特に中學校卒業生が大半を占める現状にあるにも拘らず四年修了者と同様に無味乾燥な三角立體幾何等の講義を繰返してゐる矛盾に鑑み今回の講習會が催されたのであらう。文科生にどんな講義をすれば面白く又有益であるかは仲々困難な問題だが自分としては「論理の實習」といつた様な意味でこれを生かして行つてはどうかと思ふ、即ち専門的に数学の各部門に拘泥せずにもつと廣く一般生に向けた講義方法を取る方がいゝんぢやないかと思ふ、それにしても相當の困難が伴ふもので自分としては今具體的にはこの問題について何も考へてゐない」

この講演記録は書籍化されたが、東京學生消費組合圖書部の圖書評論誌では眞羅劫(筆名であろう)が痛烈な書評を載せている。吉江・田邊に対する書評はある程度正しいが、高木を批判することには失敗している。論理の實習としての数学教育を批判することは、實際容易ではない。

オスロで開催される第5回ICM(1936.7)に就いての1936年1月のコメント。

「理學部高木貞治教授は語る

今回の總會で一番期待されるのは世界數學者の提携を計るやうに規約を改正することだが、その外に各國學者の研究報告がある筈で、盛會を豫想される。何分にも場所が諾威なので日本からはチヨツト行けないが、英、獨、佛、米邊りからは多數の權威がゾクゾク押しかけることだらう。各國が政治的に反目し合つてゐる現在學問による提携は益々必要なわけでこの大會には大きな期待がかけられる」

高木の来るべき停年退官を受けて、曙町の高木邸応接室での1936年3月のインタビュー。応接室には時代物らしきピアノ1台と熊の皮が敷いてあるのみだったという。

「わしはいつも夜になると一杯飲んで一寝入り、そうすると十二時頃には眼がさめる、二、三時間書物を読んで、空が白々となる頃また一寝入り、ほんとに起るのが十時頃だから大分寝坊だなハ、ハ、ハ」
「趣味なんて面倒くさい、まあ強いて言へば晩酌が趣味さ、それも噂によると余程好きで、仕舞にはアルチウになりやせんかと注意して呉れる人も時々あるが有りや嘘、嘘、やつと二本が精々だから……」
「しかし近頃はあまり勉強もしなくなつたものだな、若い頃は余暇にまかせて英獨佛の新作家の文藝作品を讀破したんだが今は少しも讀まない、勿論不精なのは昔からのことで學生時代は講義のノートは一つもとらなかつたからな、面倒くさいのでパツとした趣味もなく、晩酌位が精精、従つて運動もせず、活動寫眞も見ない、芝居？芝居は少し好きだよ、映畫は近頃の流行とかいふものなのでどうも親しみがないが芝居はいゝ、しかし芝居でも獨乙なんかのは新形式のほか古典の味をちよびちよび混ぜるから面白いが、そこへゆくと日本の芝居は見られん、舊態依然ふるくさいものばかりだ」

高木の酒に関する噂の発信源の一つは、著名な詩人土井晩翠の著書の記述(1934)にある。

「前號の終にフランスの最大天才パスカルの句を引いた、『少しも酒を與へぬと眞理が分らぬ、あまり多くの酒を與へても同様』其人にとつてあまり多くでは無からうが可なりの上戸中に世界的數學者高木(東京帝大)教授がある、物理學校出身の天才的數學者小倉博士、文理科大學の掛谷博士(數學)いづれも左黨の豪の者と承はる」

高木の後輩である土井に歪んだ情報が伝わったというより、若い頃の高木は酒をかなり嗜んだのではなかろうか。

高木とフランチェスカ・セヴェリ来日の時系列

高木とローマ大学フランチェスカ・セヴェリは、第1回フィールズ賞選考委員として何かしかの交流があったと推論できるが、専門が異なる為、親しく交渉を持ったのは来日以降である。

1936年1月18日、東京朝日新聞朝刊がセヴェリ来朝を報じ、高木はコメントを寄せた。

1936年1月29日、第1回日伊交換教授としてセヴェリが外務省文化事業部と国際文化振興会の招致で来日し、夕方、帝国ホテルに投宿したセヴェリを高木他が来訪し打合せを行った。

2月3日、セヴェリは東大理学部で十回の予定で「多変數函数論」を講義した。小平邦彦(1938年3月東大数学科卒)其の他が聴講している。

同月4日、セヴェリは夫人・アウリッチ駐日大使・マリアーナ参事官と東大を正式訪問し長与総長・高木の出迎えを受けた。続けて、下位春吉の通訳で「現代伊太利亚文化」と題する3時間講演をした。

講演後、高木はセヴェリを以下のように紹介している。

「せうえり君ハ1903年とりの大學ノ講師として學界ニでびゆーシテカラ、順調ニ學問的生活行程ヲ辿ツテ、1906年ばどうあ大學、1923年ろおま大學ノ教授ニ就任シ、又1926年伊太利現政府ニヨツテ創立サレタ「伊太利學士院」ノ會員ニ列シタノデアアル。伊太ニハろおまニ古イ傳統ノ有名ナリんちえいノ國立學士院ガアリ、ソノ外とりの、みらの、ぐえねちや等々ニ小規模ナガラ、ソレゾレノ傳統ヲ持ツ多數ノ地方的學士院ガアルガ、前記ノ「伊太利學士院」トイフノハ、ソレヲハ別ニ、伊太利現政府ノ下ニ新シイ使命ヲ持ツテ生レタモノデアアル。使命トイフノハ國粹發揚ナドヲ重心トスルノデアアラウガ、先日せ君ノ講演デハ「新陳代謝」トイフヤウナコトガ、強イ文句デ述ベラレタヤウデモアツタ。人文科學、自然科學、文藝、美術ノ4部門ニオイト全國的ニ第一流ノ新鋭ヲ網羅シヨウトイフノデアアルガ、定員ハ上記四部各15人、現今ハマダ總員45人デ、院長ハ無線電信ノまるこニデアアル。サウシテせうえり君ハ同院ニオケル唯1人ノ數學者トシテ伊太利數學ヲ代表スルワケデアアル。

せうえり君ノ數學上ノ業績ヲココデ述ベルコトハ差控ヘネバナナルマイガ、唯一言スレバ、抑モ伊太利デハ現王朝ニヨツテ統一ノ直後ニ多數著名ナル數學者ガ輩出シテ數學ガ勃興シ、優ニ佛獨ノ先進國ニ雁行スルニ至ツタガ、特ニ幾何學ニオイト特色ヲ發揮シテキル。せうえり君モソノ傳統ニ從ツテ從來代數的幾何學ニオイト著シイ研究ヲ發表シテキルガ、今回東京帝大ニオイトハ2月中約10回ニ亙ツテ多變數解析函数論ノ講義ヲスル答デアアル。幾何學的ノ方法ニ由テ新味ヲ出サウトイフノデアアラウ。せうえり君ハ今回ノ來朝ガ形式的、儀禮的ニ終ラナイデ、何等力實質的ナル或物ヲ日本ニ殘シテ行キタイ意氣込デキルサウダカラ、吾々トシテモ大ニ期待ヲ持ツワケデアアル。

シカシナガラ、せうえり君今回來朝ノ使命ニいたりー文化ノ一般の宣傳トイフヤウナ側面モアルデア

ラウ。ソノ第一聲トシテ去ル2月4日東大ニオイテ「現代いたリーノ文化」ニツイテ一般向キノ講演ヲ試ミテ、1870年ノ王國統一ヨリ現今ニ至ル各時期ニオイテ文學美術音樂及ビ科學ノ各方面ニ互ツテ伊太利文化ノ特色ヲ説明シタ。講演ノ中、折ニフレテハ國際聯盟ニ對スル不滿、先進國ノ利益壟斷ノ抗擊、サテハふあしすもノ眞精神ノ宣明ナド、演者ノ所謂「脱線」モアツタガ、勿論原稿ニ書イテアツタ脱線デアラウ。何シロ約3時間ニ互ツテ滔々數千言、懸河ノ辯ヲ揮ツテ聽衆ヲ魅了セシメタ。筆者ノ接シタ數學仲間ノ中デせうえり君ハ稀ニ見ル、或ハムシロ唯一ノ雄辯家デアル」

同月5日、重光葵外務次官邸にセヴェリとシャリアピンが招待された。

同月6日、セヴェリは東大理学部で「多変数函数論」を講義した。

同月7日、国際文化振興会でセヴェリ歓迎会があり、天羽英二外務省情報部長が出席した。

同月26日、二・二六事件発生。

3月4日、セヴェリは東京文科大学で「數學教育ノ原理」を講演した。

同月12日、帝国学士院例会でセヴェリの論文「代數面上ノ點集合ノ或例」を高木貞治が代読した。

同月24日、作家の野上彌生子日記より、柳沢とは柳澤健外務省文化事業部第三課長である。

「柳沢よりタ方デンワ。二十九日セヴェリを能に案内する件。うちの招待とする事を申出る。Sの事もなんの不安もないらしい。たゞ金の点をハッキリさせる照会を今してやつてゐるだけで、その返事の来次第に確定するものゝやうなり。今後文化的な交渉にセヴェリ氏があたるらしいのでSも紹介しておいた方よからんと柳沢氏の配慮なのである」

同月29日、作家の野上彌生子日記より。

「午後一時からセヴェリ博士夫妻を宝生会に招待。セヴェリさんは六尺ゆたかな大男で、鮭いろの強健さうな身体——こんな身体を見るといかにも肉と云ふかんじが強くなる。頭は褐色。もちやもちやと細かく縮ちれている。後頭の下の太い頸の上に盛りあがつてゐる—うねの肉。腸詰を乗つけたかんじ、顔は写真よりははずつと長く、突き出た立派な鼻と穏和な眼をもつて、顎にV形の鬚を貯へてゐる。マダム・セヴェリは黒いくつとした艶な眼をして鼻も美しい。たゞ頬の下部が円く張つて顎のないやうな感じがする。しかしこれが南欧のイタリ美人の型かも知れない。洋服も帽子も毛皮のショールも黒の—いろである」

「セヴェリ夫妻のどちらが多く能を解したらう。夫人の方がよいアダプテーションをもつらしい」

同月31日、高木は東大を停年退官した。

4月3日、セヴェリは日本数学物理学会総会で相対性原理に関する自身の新説を発表した。

同月9日、作家の野上彌生子日記より。

「帝国ホテルにセヴェリさんの送別会を文化振興会で催し父さんと私と招待されたが、私是不參。私にはこんな時に着て行くやうな訪問服がないのだときいたら人はびつくらするだらう。余計なものだとおもふが、やつぱり一枚は拵えておく方よろしかるべし」

同月20日頃、セヴェリ夫妻は帰国した。

7月6日、外務大臣有田八郎は総理大臣廣田弘毅にセヴェリの勲二等瑞宝章叙勲を上奏要請した。

同月9日、下條康麿賞勲局総裁はセヴェリの叙勲理由を提出した。

同月11日、総理大臣廣田弘毅は天皇に裁可を仰いだ。

同月 13 日、セヴェリの勲二等瑞宝章叙勲が施行された。

高木は、停年退官を目前にしてセヴェリ問題に半年近くを費やすことになった。

第 1 回日伊交換教授としてイタリアに渡った国際法学者田中耕太郎がグラン・オフィシェー・クーロンヌ勲章を受章したことから、日本側もグラン・オフィシェー・クーロンヌ勲章受章者のセヴェリに同等の勲章を出すべきだとする杉村陽太郎イタリア大使の外務電が届いたという。柳澤健外務省文化事業部第三課長は、旧知の高木に依頼してこの問題を巧妙に解決した。セヴェリ問題で、高木と柳澤は密接な協力をしていた模様である。

柳澤と田中の戦後の対話を引く。

柳澤「当時、僕は日本にいて、あなたと交換的にイタリアから日本にやつていたものだが、この『プッチット・ショーズ』の勲章問題では苦勞しましたよ。ローマの杉村大使から『田中博士が叙勲された。セヴェリ氏にも至急頼む』と電報してきたので、早速その話を賞勲局に持ち込んだところ、当時の總裁は下條さんで、細かいの細かいのつてお話にならね。『イタリアが何をしようと、また日本とイタリアとの関係がどうであらうと、かゝる政治的な意味で日本の勲章をやることは、絶対にできぬ。要はセヴェリ教授が、眞にわが國の學界に貢献したかどうかにある。それ以外に、考慮の余地はない』という返事です。しかし僕には、セヴェリ教授の高等數學(古典幾何學とか言つた)何回かの講義が、日本數學界にどんな影響を與えたかなんて、固より判るはずはない。致し方がないので、専門家の高木貞治博士に事情を話してお願して下條總裁あての作文を書いて貰つた。ところが、事高等數學の問題だから、法學士の氏に判るはずはない。先方の希望によつて、直接高木博士に説明に出掛けて貰つたところ、その説明で益々判らなくなり、トド根氣負けの恰好で下條總裁も、あなたが貰つた同格の勲章をセヴェリさんにやることになりました。あの時は閉口した。どうしてプッチット・ショーズどころか、グランド・ショーズでしたよ」

田中「その後トウチ教授が同じ交換教授でイタリアから日本に来たとき、僕は下條氏に同氏の佛教に對する貢獻というものを大いに説いて、勲章を出して貰いたいと頼んだものですが、同氏は、『佛教に貢獻したということは確かだが、日本の佛教に貢獻したかどうか、これが問題です』と云つて、當時の關係者の我々を面喰わせたものでしたよ……」

東大法学部出身で統計学の著作がある下條康麿賞勲局總裁は、前任者が売勲事件で失脚したことから、公務員の定期人事によらない勲章授与には厳しく臨む姿勢で知られた人物である。

アジア歴史資料センターで閲覧できる内閣資料「叙勲裁可書・昭和十一年・叙勲卷十三・外国人二伊國「ローマ」大學教授「フランチェスコ、セヴェリ」叙勲ノ件」(レファレンスコード A10113185800)を紹介する。

人普通第四三八號

昭和十一年七月六日

外務大臣 有田八郎 大臣公印

内閣總理大臣 廣田弘毅殿

伊國「ローマ」大學教授「セヴェリ」叙勲ノ件

伊國「ローマ」大學教授「フランチェスコ、セヴェリ」叙勳ノ儀別紙ノ通上奏致候間可然御取計相成度此段申進候也

伊國「ローマ」大學教授「フランチェスコ、セヴェリ」儀ハ我學界ニ寄与スル所勲カラサル趣ヲ以テ叙勳ノ儀文部大臣ヨリ申立有之候處同人ハ日伊文化提携上ニモ貢獻スル所多ク別記ノ通功績有之候ニ付テハ此際右功勞ヲ御表彰被遊頭書ノ通叙勳●仰出候様仕度」此段議ヲ奏ス

昭和十一年七月六日

外務大臣 有田八郎 大臣公印

勳二等瑞寶章

伊國「ローマ」大學教授 フランチェスコ、セヴェリ

自國「グラン、オフキシェー、クーロンヌ」勳章所有

右者世界有数ノ數學者ニシテ伊太利學士會員タル外「ベルリン」、「レニングラード」、「リエージュ」、「バルセロナ」各學士院客員、「パリ」學士院受賞者タリ又「トロント」、「ヴェノス、アイレス」各大學名譽教授ナルガ我學界ニ於テモ夙ニ其名聲ハ喧傳セラレ親シク其學說ヲ聽カンコトヲ渴望セルノ状ナリシニ客年日伊兩國交換教授ノ議成立セル結果同人ハ過般其第一回伊國派遣教授トシテ來航シ二月四日以來四月中旬ニ亘リ東京帝國大學、東京文理科大學、東北帝國大學、日本數學物理學會、國際文化振興會、京都帝國大學、大阪帝國大學等ニ於テ講演ヲ行ヒ帝國學士院ニ於テハ二月例會開催ノ折特ニ招シテ歡迎ノ意ヲ表スル所アリ其際伊太利學士院長ノ名ニ依リ「メッセージ」ヲ齎シ日伊兩國ノ文化的連絡ノ熱烈ナル意圖ヲ明シタリ次テ三月例會ニハ會員高木貞治ノ紹介ニ依リ「代數的表面上ニ於ケル點集合ノ系列」ト題スル論文ヲ報告セシカ外國人ニシテ帝國學士院ニ於テ斯ク正式ニ論文報告アリシハ同人ヲ以テ嚆矢トス

由來同人ハ代數學的幾何學ノ大家ニシテ現代伊太利學派ノ代表者ト認メラルル碩學ナルカ近時又多變數解析函數論ニ於テ注目スヘキ研究多キヲ以テ前記各所ニ於ケル講演ハ何レモ我學界ヲ裨益スル所勲カラス殊ニ東京帝國大學ニ於テ十回ニ亘テ行ヒタル函數論ノ連續講演ノ如キハ外國人學者ノ講演トシテ恐らく未曾有ノ成績ヲ収メタルモノト謂フヘク其講演筆記ハ多數學者ノ要望ニ依リ同大學ニ於テ翻譯整理ノ上近ク出版ヲ見ントシツツアリ之レ畢竟同人ノ獨創的ナル幾何學的方法ニ依リ多變數解析函數論カ極メテ新味ニ富ミ學者ヲ啓發スル所多キカ爲ニシテ本邦學界ハ此清新ナル刺激ニ依リ俄然斯方面ニ於テ新研究ノ領域ヲ擴張セントスル氣運ヲ醸成スルニ至レリ又日本數學物理學會年會席上ニ於テ試ミタル特別講演ハ「常識ヨリ導カレタル相對性原理」ト題スルモノニシテ其内容ハ近ク同會記事上ニ發表セラルヘキ見込ナルカ常識ト矛盾セサル相對性理論ノ公理ヲ與ヘ該理論ニ關シ最近ノ諸說ヲ其立場ヨリ一括説明シタル甚々興味深キ講演ナリ

更ニ同人カ帝國學士院ニ提出シタル前記論文「代數的表面上ニ於ケル點集合ノ系列」ハ最近數年間ニ亘リ同人研究ノ成果ナル所謂「對等系列」理論ヲ綜合セルモノニシテ斯學上極メテ重要ナル結果ヲ包含シ既ニ「プロシーディングス、オヴ、インペリアル、アカデミー」上ニ其發表ヲ見タリ

以上同人ノ學界ニ對スル業績ハ日伊學術交換上極メテ意義深キモノニシテ功績洵ニ顯著ナリトス

抑モ日伊文化交流事業ハ兩國ノ學術交換及提携ニ依リ東西文化ノ融合ヲ圖ラントスルノ趣旨ヨリ出テタルモノニシテ伊國側ニ於テハ「ムッソリーニ」首相之カ實現ニ最モ熱意ヲ有シ「セヴェリ」教授派遣ニ關スル人選ノ如キモ同首相ノ發意ニ基クモノト親ルヲ得ヘク又現ニ客年十二月伊國ニ出張ヲ命セラレタル東京帝國大學教授田中耕太郎ニ對シテハ同國ニ於テ厚遇最モ努メ既ニ「グラン、オフキシェー、クーロンヌ」勳章ノ贈與アリ其上最近「ローマ」大學政治學部ニ日本語講座ヲ設置シ「ナポリ」外國語學校ニ日本語科ヲ新設スル等同國各方面ニ於テ我國ニ對シ大ナル關心ヲ有シ文化的提携ノ氣運盛ニ勃興セルヲ認ム從テ同教授ノ來朝ハ伊國ニ於テ相當重要視セラレ居ルハ推測ニ難カラス且同人ハ單ニ數學界ノ碩學タルニ止マラス一般學藝方面竝ニ政治方

面ニ於テモ有カナル發言權ヲ有スル人ニシテ今後兩國文化關係ノ提携上尙又親善關係ノ増進上同人ノ努力ニ俟ツヘキモノ
多々存スヘシト認メラル

賞勳局上申第二七〇暗號 昭和十一年七月十一日裁可 昭和十一年七月十三日施行

昭和十一年七月九日 内閣書記官長公印 内閣書記官公印

内閣總理大臣 大臣花押 賞勳局總裁 總裁公印

伊國「ローマ」大學教授「フランチェスコ、セヴェリ」ハ世界的有數ノ數學者ニシテ伊太利學士會員タル外各地ノ學士院客員ナル
處客年日伊兩國交換教授トシテ來朝シ東京帝國大學其ノ他各所ニ於テ講演ヲ行ヒ就中多變數解析函數論ハ極メテ新味ニ富ミ
本邦學界ノ斯方面ニ於テ新研究ノ領域ヲ擴張セントスル氣運ヲ醸成セシメ又「常識ヨリ導カレタル相對性原理」ト題スル特別講演
ハ最近ノ諸説ヲ其ノ立場ヨリ一括説明シタル興味深キモノナリ且同教授カ帝國學士院ニ提出シタル「代數的表面上ニ於ケル點
集合ノ系列」ト題スル論文ハ斯學上極メテ重要ナル結果ヲ包含シ學士院例會ニ於テ正式ニ報告發表セラレタル等日伊兩國學術
交換上意義深キモノニシテ我學界ニ裨益シタル功績顯著ナリトス仍テ此際外務大臣上奏頭書ノ通叙勳被仰出可然哉此段允裁
ヲ仰ク

可公印

伊國「ローマ」大學教授「セヴェリ」叙勳ノ件

右謹テ裁可ヲ仰ク

昭和十一年七月十一日

内閣總理大臣 廣田弘毅 大臣公印

率直に言って、セヴェリ来日が日本数学界に裨益したと確言できるか否かは明確ではない。多変数
解析函數論・代數幾何学は当時の日本数学界では流行しておらず、相對性理論は物理学界・数学界
共に重視されておらず、聴衆には恵まれていない。イタリアも 7 年後には日独伊三国同盟から外れる
のである。小平邦彦がアムステルダム ICM に出席した際、セヴェリが「自分の講義を聴いた小平」と紹
介したが、小平自身は前席の数学科教授の禿頭しか記憶に残っていなかったという。

ここで北大数学科教授吉田洋一(当時 38 歳)の發言を引用する。

「高木先生は、酒の席などでは、時に寸鉄人を刺すような皮肉を言われましたね。掛谷宗一先生は、か
ねて軍人好きを表明しておられたので、例の二・二六事件の直後のある酒の席で、私が掛谷先生に、
「こういう事件が起こっても、やっぱり軍人がお好きですか」と申しますと、藤原松三郎先生がよろこんで、
「掛谷君は軍国主義だよ。吉田君もっとやれ」とけしかけたりしていますと、高木先生がポツリ「吉田は
まだ若いつもりでいるんだな」と言われました。先生に一本とられました」

高木と哲学

高木が哲学に接近した形跡はなく、哲学界も高木の数学を評価したとは言い切れない。西田幾多郎
の発信書簡を例に挙げる。

日付	宛先	文面
----	----	----

1940年1月24日	下村寅太郎	小堀憲君が「大数学者」を送ってくれたので面白く一気によんでしまいました リーマンは少し淋しかったがワイエルシュトラスはコヴァレフスキといふ様な花形 が入って来るので中々にぎやかだ W が七十近くなつてもアベル積分の本質を闡 明しようと血みどろの努力をつづけてゐたと云ふに至つて少なからず勵まされた 高木氏が何をなしたのかと云ふことも分つた
1941年5月19日	下村寅太郎	共立社から出た「最近高等数学講座」の中の高木氏の「近世数学史談」といふも のお持ちなきや
1941年5月29日	岩波書店 布川 角左衛門	初御手数恐れ入りますがどうか神保町の御店の方に頼んで 高木貞治著 近世 数学史談 といふものを探して下さいませいか 此書は固共立社刊行の最近高 等数学講座の中に出たものにてこの講座は非賣品とはなつて居りますが新修版 といふものも出て居り 高木氏のこの本の終に一圓五十銭と値段附がある故に別 冊にて販賣したものと存じます 共立社に尚新本があるものかも知らず 若しなけ れば古本屋の方へお聞き願ひたいと存じます
1941年6月26日	下村寅太郎	高木氏の「近世数学史談」中々面白う御座いました 数学の方は分りませぬが大 数学者といふものゝ着眼点や数学的思想發展の経路に教へられる所があるとお もひます 岩波へ古本を探してくれる様頼みました 尚暫くおかし下さい
1941年6月30日	下村寅太郎	高木氏の本岩波へ頼んで置きました處岩波の布川が高木氏へ話しました由にて 高木君よりもらひました 彌永君の「圖書」のもの私も面白くよみました
1941年8月2日	下村寅太郎	「位相数学」をどうも岩波から送つて來ませぬ 君の北海道の知人といふのに聞 いて見て下さいませぬか 本年五月號の「位相数学」です 近藤とかいふ人の位 相数学の論文がのつて居るものです 若し餘分のものでもないか それから文理 の何とかいふ人の位相幾何(或は数学?)と高木氏の数学雑談とかいふもの 共 立社から出たといふもの 御手数ながら願ひ申上げます 別にお探しを願ふまで ではないが尊兄本郷神田の古本屋を見て歩かれる節これ等のもの萬一見つかり ましたらお求め下さい
1941年8月7日	下村寅太郎	書物御送下され本日落手いたしました 難有御禮申上げます 暫く拝借願ひます

西田の高木理論に対する理解は、明らかにディレクタンの域を超えていない。高木は西田に「近世数学史談」を贈与したが、西田には高木に贈り返しできる著作が無かつたらしい。西田は、西田哲学に接近した末綱愨一とはかなりの接触を持ったが、高木と直接の接触を持つことは回避したのか、西田の日記に高木の記述は一切見られず、高木も西田に言及した記録は見当たらない。西田は同書の読後感を雑誌に執筆したので、高木の印税収入に貢献したのではなかろうか。

1940年11月10日の文化勲章授章式は、同時授章した高木と西田が接触する好機だった。しかし、重度の痔疾により西田は出席を見合わせている。

日本に於ける科学哲学・数理哲学の第一人者田邊元(1904年9月東大数学科入学・1905年に哲学科転科)は、高木に傾倒していたとして田邊門下に屢々語られる。田邊の事例を考察する。

田邊と親しかった作家野上彌生子の日記を引用する。

日付	文面
1953年10月1日	理科からどうして哲学に変わったかの昔話はおもしろかった。数学をはじめ志したのは一つはお父様の希望、一高の友野、数藤、須藤氏の批判。大学では高木貞二氏に傾倒した。しかし演習の微積分の問題が殆んど解けない。一週に一度の試験。白紙はださないが、一つとしてとけないので絶望、狩野先生に哲学に転ずる事を相談したら、哲学なんてアンナ馬鹿な学問をする事はない。よせといはれたのを、幾度も押し返して転科の事を相談。狩野先生がそれについての試験の事を交渉して下すつた。論理 95, 漢文 85, 国語 74 とつた。これは上野直昭氏が事務所に行つてしらべて来た
1954年3月26日	帰ると寺沢夫人が見え、暮れてお迎ひながら寺沢先生も来らる。いつしよにおスシを頂き、食後茂吉郎夫妻も来る。奥さんとお嫁さんはうまく行かないらしい。これはもともとから予想されてゐた怖れである。田辺先生が数学のもんだいに閉口して、大学一年で哲学に代つた話をもちだしたら、一週に一度もんだいを出したのは高木貞二氏ではなく、さんであらうといはれた。ところで寺沢さんは同氏のフランス語の種本を一高の図書館で見つけた。大学の図書館にはない。先生がもつて行つてゐるわけ。それで一高の図書館ですつかり予習をしておき、今日はこんな問題がでるぞ、と黒板に書いて見せる、先生が入つて来た時いそいでそれを消して席につく。する(と)先生がすつかりそれと同じ問題をだすので、みんなどつと笑う、うんうん。――

寺沢とは、1905年9月に東大物理学科に入学した寺沢寛一である。田邊が言うように、東大数学科・物理学科の必須単位であつた微積分学の演習が難しいために将来を悲観するのは理解できる。実際、函数解析の世界的権威だつた吉田耕作なども、一度微積分学の単位を落として再履修せざるを得なかつた。田邊は転科後、科学哲学や数理哲学の分野で活躍する。

田邊は1954年11月30日に発行された「数理の歴史主義的展開 数学基礎論覚書」(筑摩書房)で以下の記述をしている。

「数学に對する愛を私に吹込まれたのは、學界の至寶として今も健在せられる高木貞治先生であつた。先生の最も早い頃の名著『新式算術講義』は、初めて純粹なる数学の美しさを私に教へたものである。私はその美に引き着けられて数学を學ぼうと志したのである。デデキントの切斷論が、ほとんど私の一生を貫く問題となつたほどに強い印象を與へたのも、外ならぬ先生の解説を通じてであつた。かくて東大理學部一年に入學して始めて先生の「初等数学雜論」と題する講義を聴いた私は、年來のあこがれを満足し悦に充たされたものである。しかし生來数學者たる素質を缺いて居た私には、演習特に微積分の演習は、全く責苦であつた。そこでは出された問題が、一つも解けないことが常であつたのである。私はこれではどうい数學者になる資格は無いものと諦めて、聴講僅に三ヶ月にして休學、翌年文學部の哲學に轉じたのである。ただ高木先生の講義を聴く機会を失ふことは、いかにも残念であつたが、それも致方なかつた。卒業後仙臺の理學部に講師として在職中、数学の講義を一通り聴講し、その關係で数理哲學の研究に手を着けたのも、そのやうな愛着を数学に對して懷いて居たからに外ならない。爾來四十年になんなんとするが、高木先生に對する尊敬は今も昔と渝ることがない。数學者としての先生の偉業を十分に解することができない私も、先生と同じ時代に同じ國土に生まれ、先生の風貌に

接し先生の講義を聴き、数学の全領域に対する先生の透徹限なき洞察と展望との一端に觸れ得たことをもつて、限無き幸運と感謝するのである」

田邊は同書を高木に送付したものと推論される。田邊が生前に受領した手紙は、現在全てリストアップされており、高木が1954年12月2日消印・1955年5月27日消印の2通を送付した記録がある事から、時期的にそう判断される。また、田邊が以前に高木と文通していないことも明らかである。内容は現時点で非開示であるが、田邊にとって極めて辛辣な内容だった可能性が極めて高い。

新式算術講義に関連して1957年に於ける高木の証言を引く。

「一番ひどいのは――田邊という哲学者がいるね。あれはもと数学をやって、1年いたんだ。今でもぼくのあの本を引出して、哲学の空間がどうやら引出すから。ぼくは迷惑なんだ。本を出すから悪いのかもしれんが、西洋の本屋のね、払いをするためにね」

当時存命だった田邊がこの批判を閲読したか否かは不明である。田邊のために弁解すると、新式算術講義を参照文献として著書に引用しているわけではない。田邊が高木に送った信書内で引用したのかもしれないが、田邊が送付した高木宛私信も所在不明で確認できない。

田邊の全蔵書は没後に寄贈されリスト化されている。中には高木の基本著作「初等整数論講義」(1931)、「近世数学史談」(1933)、「大阪帝国大学数学講演集」(1938)、「近世数学史談」(1942)、「数学小景」(1943)、「解析概論」(1943)、「代数的整数論」(1948)、「初等整数論 概説及び類体論」(1948)、「数学の自由性」(1949)、「数の概念」(1949)が網羅されているが、不思議なことに「新式算術講義」は見当たらない。

高木が親しく交流した哲学者が西田や田邊を敵視した山崎謙であり、知の国際交流を賞揚し続けた事実背景を踏まえると、高木の三高時代の教官河合十太郎と西田が石川県出身ということで、西田と高木に知的相関を見出そうとした下村寅太郎の解釈を、高木は迷惑として即座に拒絶するのではなかろうか。存命中の高木は、県人会の類に積極的に参加した記録は無かったし、第一次・第二次世界大戦を通して数学には国境が無い事を指摘している。

藤原工業大学教授から慶応義塾大学教授時代まで

1941年4月1日、慶応義塾大学長小泉信三と東大総長平賀譲の斡旋で、新設の藤原工業大学は東大工学部教授を停年退官する海軍造兵中将谷村豊太郎工学博士を学部長に迎えた。谷村は計算図表学の紹介者として知られた造兵技術者である。

1939年に藤原工業大学予科に入学した第1期学生が、予科を卒業し本科に進学する1942年4月までに学部を整備する必要があり、谷村が中心となってまず専任教授を選出し、更に専任教授と協議の上で各学科の担当者を選任した。谷村は、最初に東大停年退官後5年を経た高木貞治を1941年9月1日に藤原工業大学教授(数学担当)として迎えた。谷村は、就任を予定されていた教授を交えて学科課程を立案し、1942年3月31日付で文部省から認可を得た。電気工学科・機械工学科・応用化学科の第1学年は、1から3学期まで毎週2時間数学と数学演習をすることになっている。

数学に関係する藤原工業大学兼任講師は以下の通り。ポテンシャル論の研究者である亀谷俊司と

日本における水文学の開祖となる菅原正巳以外は代数学者である。

職名	氏名	現職	就任日時	担当科目
兼任講師	荒又秀夫	第一高等学校教授	1942年4月1日就任	数学演習
兼任講師	亀谷俊司	東京女子高等師範学校教授	1942年4月1日就任	数学演習
兼任講師	末綱恕一	東京帝国大学教授	1942年4月1日就任	数学
兼任講師	菅原正巳	武蔵高等学校教授	1942年4月1日就任	数学演習
兼任講師	岩沢健吉	東京帝国大学理学部嘱託	1942年10月1日就任	数学演習

藤原工業大学の卒業生で、高木の講義を聴講した者の証言は発見されていない。大学創設者藤原銀次郎の伝記に、理由に該当するものがある。

「谷村學部長が藤原氏の意を體して行つた、いろいろの教育行政の中には、まことに奇抜な面白いものがある。それは數學の教授であつて、機械、電氣、化學のあらゆる面にわたつて數學が基礎になることはわかつてゐても、何分にもむづかしい學問なので基本的の智識に缺けて、そのまま將來自分が困る因となつてしまふのが多い。そこで谷村氏は世界的の數學者である高木貞治氏を迎へて來た。直接に學生に教授して貰ふには餘りにも偉すぎる學者である。そこでまづ數學の教授はじめ大學の教授達が高木氏から教へを受け、その教へに従つて學生に教へるといふ間接方法を採用した。まことに奇抜なやり方であつて、他の大學にも嘗て例のない方法に違ひないが、この谷村氏の方策は極めて効果的であり豫期以上の成果が納められた。

藤原氏も教授達と一所になつて高木氏の講義を聞いて見た。そして一驚したことには、他の先生の數學の講義をきいてもむづかしくて容易にわからぬのに、數學の専門智識など持ち合せてゐない藤原氏にも高木氏の講義は實によくはつきりと頭に入ることであつた。むづかしい數學を素人にもわかるやうに説明し得る人は、奥義に達した者でなければ出來ないことである。何事によらず眞の達人となれば、誰にもわかるやうに話の出來るもので、誰にもわからぬやうなむづかしい事ばかり云ふのは未だ奥に達せざるものだと、今更のやうに感じ入つたといふことである。

この高木先生の間接講義によつて藤原工大の數學講義法は一變した。學生も數學を悦び樂んで聞くやうになり、基本智識は深くなつて、卒業生の一つの特長は英語と數學が群をぬいて優れてゐると云はれるやうになり得たのである。藤原氏が學校創立の當初に抱いた方針は、まことに鮮やかに實現の日を迎へ得たのであつた」

藤原の伝記を敷衍すると、藤原工大時代の講義は末綱が代行したということになる。藤原は、恐らくは高木の講義を受講した最高齡者(高木より6歳上)になる。

数学の人事は、好感を持って迎えられた模様である。当時の慶応義塾大学内科助手武見太郎(後年の日本医師会長)は以下の回想を残している。

「工業大学ではあつたが、数学の高木貞治、末綱恕一の一流数学者をもつてあてられたことも基礎教育重視の証拠であつて、何とも嬉しいことであつた。高木、末綱両教授に塾の数学教育を大学から幼稚舎迄一貫して指導をうけたら素晴らしいとひそかに期待したが、これは實現されなかつた」

1944年8月5日、財団法人藤原工業大学は解散して慶応義塾に寄付され、即日慶応義塾大学工学部となり、藤原工業大学予科は慶応義塾大学予科と改称された。高木の工業教育に於ける数学観は、工員や技師に高等数学普及教育を施す為に開設された日本数学錬成所に関係して披瀝された。

1943年3月23日15時、大東亜会館で開催された近く開設される日本数学錬成所に関する懇談会に、錬成所同人の高木他の数学関係者、物理学者・田中館愛橘、軍関係の工場工員養成所・民間工場の技術関係者など二百名が出席したことについての朝日新聞のインタビューより。

「高木貞治博士談 高等程度の数学を知ると否とが生産能率に非常に関係が深いことは言ふまでもないので、これが普及すれば一段と生産増強が達せられるといふことは色々な点から言へると思ひます。多数工員諸君の参加を期待してゐます」

高木と工学の関係については、長女の娘婿で民間における選炭の権威者・三井鉱山技師黒田祝の証言が期待されるが、発見されていない。ただ、現場工員より工員を指導する技師クラスに対して数学教育したほうが、生産効率向上に有益なのは言うまでも無いことである。尤も、数多い工員が参加するならば、教官として多数の数学者も必要となるので、数学界には好都合ではある。少なくとも、Hilbertならこういったコメントをすることを潔しとしなかつたらう。

1944年12月26日、文部省は東京高等師範学校・東京女子高等師範学校・広島高等師範学校・金沢高等師範学校に特別科学教育班を設置し、特に優れた学生に科学教育を施すこととした。東京高等師範学校特別科学組第1期生の相山義道は、佐々木元太郎の誘いで高木の講演を傍聴したという。高木の講義を聴取した一番若い世代ということになるが、「内容理解不能」だったという。

1945年7月末、大阪帝国大学数学科本部が豊郷村に疎開した。教官の木下佳壽の回想。
「高木貞治先生が豊郷村へ来られたのはこの最中である。東大の様子等色々な話があつて後正田研の連中を集めて(それは薄暗い部屋であつた)、自然数の公理と簡単になし得ることを話された。私が東大在学中に高木先生は集合論の講義の後に自然数論に言及されたことがある。その後ずっと考え続けて居られたらしい。岩波から出版された「数の概念」に、豊郷村での高木先生の話が、まとめて書いてある。高木先生は正田先生の処へ三日ほど宿泊して帰られた。高木先生の顎髯の伸びていたのが妙に目についた」

高木と1957年の数学教室誌インタビュー

国土社刊行の数学教室誌は、高木邸でインタビューを行っている。インタビュアーは金原和子・清水達雄・志村五郎・杉浦光夫である。志村はこのインタビューを以下のように書き、話題を呼んだ。
「ここで少しさかのぼって高木貞治の印象を書く。一九五五年に欧米から何人かの数学者が来て学会があつたがそのあと、日本人学者だけの夕食会があり、私は彼とは違うテーブルであつたが近くにおいて、彼が話をしているのを聞いた。何かありふれた冗談を面白そうに話していて、まあ平庸な感じであつた。そのしばらくあと、私達の仲間数人が彼の自宅に話を聞きに行った事があり、その記録は残されていると思うが、そこには記されていない点をここに注意しよう。彼は八十歳で耳が遠かつたので、私達の言

葉を彼の近親のある女性が彼に聞き易い声で言い直すのであった。

それより十五年ぐらい前、彼がその頃の数学を「過渡期の数学」と呼んでいた文章があったので「あれはどういう意味か」と私は聞いてみた。単に話題をさがしてそうしたに過ぎない。その女性を通してそれが伝えられると、途端に彼は色をなして怒り声で何か言った。どう言ったか忘れたがいささかあきれた。私が彼の声を聞いたのはその二回だけであったが、大いに失望した。後で彼は近親者にも嫌われていたと聞いた。

「君子は泰にして驕らず、小人は驕りて泰ならず」と論語にあるが、「驕りて泰ならざる実例を見せられてしまったのである。

これらの例から見て言えることは「十目の視る所、十手の指さす所」というのはまったくその通りである。衆人の一致した意見は、人柄のよしあしに関する限りつねに正しいものである。しかしそれは学問的価値とか芸術的価値についてはむしろそうでない方が多い。時間の要素も加わってくる。「十目」の原文も単に道徳的な面について言っているのであって、その他の面は無関係である」

実際に書かれた記録は以下の通り。

志村「先生、昔「過渡期の数学」というようなことを、ちらっときいたことがあるんですけども、大阪の講義ですか」

高木「あれは、30年ごろだね。いまの抽象数学の起りかけたころね。あんなこと、でたらめで、口からでまかせで(笑声)。あれからもう20年だね」

志村は、高木が怒った部分をそのまま文章化できなかったインタビュアーがもっともらしく文章を書き換えた事、金原が高木邸にいた記憶がないと2015年9月7日に証言している。高木は、1934年11月5日に大阪大学・同年同月24日に大塚数学会講演会で「過渡期の数学」と題して講演しており、1935年に双方共に印刷されているのだが、志村はこれらを見た訳ではないらしく、従って「大阪での講義ですか」などと質問するはずがない、と主張している。これは尤もな議論で、再版されなかった「過渡期の数学」について、阪大での講義だと言えだけの予備知識を志村が持っていたとすれば、内容も通読していたであろうし、その場合、タイトルの意味を質問することは無かったはずである。

文章の書き換えを担当したのは、志村によれば清水であったという。清水から証言は得られなかったが、近代日本数学史の知識がある清水ならばこの書き換えは可能である。高木にインタビューを途中で切上げさせることなく、何とか終らせることができた当時の清水の努力には敬意を払ってよいかもしれない。これもまた新数学者集団 SSS の一逸話である。

それはさておき、インタビュアーの書き換えによらないと推論される高木の発言を紹介する。

数学者の頭脳流出についての証言。

「このごろ日本人がたくさんアメリカへ行って、それを非常に慨歎してさ、この連中が、もう少し待遇をよくして日本にとどめなくちゃいかんて、何か宣言書をかいたね。ぼくは反対でね。なるべくながくアメリカに行ったほうがいい。

あのとき一番はじめは中山君。二番目は角谷っていうのね、戦争でちょうど中断してね、二度目に行ったんだけれども、お別れというわけで、ぼくは「とても生きているうちに会えないから、なるべくながく向こ

うにいらっしやい」といったら、「そんなことありません」と行って行ったけど、あれは向こうへ帰化しちゃったんだ、角谷君ね。向こうで結婚してさ。ぼくは帰ってこなくてかまわないけど」

高木は文藝春秋誌上で「日本の数学ということ自體、滑稽である。日本の数学、ドイツの数学、ソヴェトの数学と、分けられる筈のあるものではあるまい。藝術と同様、科学にも、國境がまたないのである」と書いている。それ迄の数学の国際性に関する主張もひずみが無い。その見解を敷衍すると、エール大学教授となった角谷静夫が「帰ってこなくてかまわない」と主張することは矛盾しない。高木は角谷の背中を押したのである。新数学者集団には、日光シンポジウムで岩澤健吉に帰国を要請し、結局拒絶された過去があるが、岩澤の背中も高木は躊躇無く押したのではなかろうか。

小平邦彦が数学科卒業後に物理学科転科した件についての証言。小平は1957年11月3日に文化勲章を受章したが、履歴や論文リストを元に推薦状を執筆したのは高木である。

「物理へいった。だから2年で済みましたね。あれなんぞは、日本の規則が——あんなの、ドイツ人なんか話すと、ばかにするんだ。学校みたいだといって。学校というのは、大学以下の、つまり義務教育の学校とか……。もしドイツだったら3年やっているうちに、自分で勝手に選んで講義をきけるから、大学もかってなところにゆけるから。5年かからなくても3年で出ちゃう。小平なんか日本の規則で、はじめ3年で数学を卒業して、あとで物理を2年やった。こっちの流儀は、お前は一年だから何々をきけという。ちゃんときまっちゃうから、それをきかざるをえないわけだ。自分勝手に、これをよしてこれをきくというわけにいかない。だからどうしたって、3年プラス2年ということになる。そんなのはシュールメーシツヒというてね、ドイツ人は非常にばかにする」

小平は物理学科を3年で卒業しているが、共通科目の微分積分学・微分方程式・幾何学などは数学科時代に単位取得済なので受講していない。菅原正夫が高木に“小平に関する Weyl 宛推薦状”執筆を依頼した際にも、高木は小平の履歴を閲読したはずだが記憶に定着しなかったらしい。

高木の一行日記

高木の没後、日記が発見された。実業之日本社社長増田義彦の記事は以下の通り。

「その御葬儀は故人の遺志により何等の宗教的形式によらずに行なわれた。本人なり遺族なりが信仰しているならよいが、誰も信じていないのに、坊さんや神主をよんだって意味ないじゃないかと、生前からかたくい渡されていたので遺族はそれを尊重したのだが、さて無宗教でということになると、はなはだ勝手に悪かったそうだ。仏式や神式、あるいはキリスト教で行なうとすれば、すべて方式がきまっており、葬儀屋が万事心得ている。いっさい葬儀屋まかせ、前例通りでことがすむ。ところが無宗教となると、葬儀屋はどうしてよいかわからず、前例もあまりないから、なにからかにまで、新しいやり方を自分で考えていかなければならない。それだけに人まかせにならず、型ばかりにならず、心のこもった御葬式ができるともいえよう。そのためばかりではあるまいが、高木博士の御葬儀は、御遺族とお弟子さん方の悲しみと愛情の中に、実に清らかな真情あふるるものであった。

高木博士の日記がまたかわっている。博士が日記をつけていられるとは、御家族も御存知なかったそうだが、なくなって一綴りの野紙の日記がでてきた。三十数行の横書きの便箋風大判野紙に、一日一行の日記が、一頁に一ヶ月づつ、昭和二十年四月、本郷のお宅が空襲でやけた日から、なくなる二

週間ほどまえまで記されてあった」

この日記を本田教授以外が引用したことはなく、検証が待たれるところである。

参照文献

丹羽基二「姓氏」(秋田書店, 1970. 7), p. 193

[高木貞治: 私と文學第三回, 文學; vol. 21, no. 8, (1953. 8), pp. 865-868]

[高木貞治: 数学教育の回顧, 算数教育; vol. 1, no. 1, (1952. 4), pp. 2-3]

[金原和子, 清水達雄, 志村五郎, 杉浦光夫: 高木貞治先生にきく, 数学教室; vol. 4, no. 1, (1958. 1), pp. 26-34]

大村喜吉「斎藤秀三郎伝 その生涯と業績」(吾妻書房, 1960. 10), p. 102

[x・y・z: 数学者のプロフィール 高木貞治博士, 高数研究; vol. 1, no. 1, (1936. 10), pp. 54-55]

[吉江琢児: 数学漫語, 文藝春秋; vol. 13, no. 7, (1935. 7), pp. 92-95]

[無署名: 高木さんと汽車見物に 数学談話會の思出も懐しく 中川(理)教授停年祝賀會, 帝國大學新聞; 658, (1937. 2. 1), p. 11]

[高木貞治: 若い世代へ五 捨てよ“空虚”な心 もつと批判的にならう, 讀賣新聞朝刊; 22974, (1941. 1. 6), p. 3]

羽賀与七郎「津軽英麿伝」(陸奥史談会, 1965. 5), p. 144

[道家達将: 学者の年輪 4 寺沢寛一と日本の数理物理, 自然; vol. 19, no. 10, (1964. 10), pp. 110-116]

田辺尚雄「青蛙選書 10 明治音楽物語」(青蛙房, 1965. 9), p. 258

池田芳郎: 「大正から昭和の初期の物理学・数学の状況」, 北大理学部五十年史編纂委員会編『北大理学部五十年史』, (北海道大学理学部, 1980. 9), pp. 30-36 所載

[萩原雄祐, 小尾信弥, 小野周: 天体物理学の歩みとともに, 科学; vol. 35, no. 2, (1965), pp. 58-64]

萩原雄祐: 「心かよわす世界の星々」, 萩原雄祐他著『わが師・わが友 2』, (みすず書房, 1967. 12), pp. 5-17 所載

山内恭彦「逸遊雑記」(岩波書店, 1977. 6), p. 240

山崎謙「変革と反逆の 77 年 山崎謙自伝」(第三書館, 1979. 12)

日本統計学会編「日本の統計学五十年」(東京大学出版会, 1983. 4), pp. 7-8

[彌永昌吉他: 座談会「数物学会の分離と二つの科学」, 日本物理学会誌; vol. 51, no. 1, (1996), pp. 26-36]

[穂刈四三二: 私の学校遍歴(6), 蟻塔; 337, (1986), pp. 18-19]

高橋秀俊「コンピューターへの道」(文藝春秋, 1979. 9), p. 24

[白井龜吉: 國定算術書の批評並に算術教授法序論(一), 教育時論; 736, (1905), pp. 9-10]

[無署名: 停年教授を語る 『中學教師はやらんから教科書は書けん』 理學部 吉江琢児教授, 帝國大學新聞; 563, (1935. 2. 18), p. 9]

中川銓吉: 「教科書に着手する迄の思い出嘶」, 富山房編『富山房五十年』, (富山房, 1936. 10), pp.

224-225 所載

無署名: 故理學博士坪井正五郎君記念資金募集廣告, 人類學雜誌; vol. 29, no. 4, (1914), pp. 129-130

無署名: 故理學博士坪井正五郎君記念資金募集第二回報告(自四月五日至五月十五日), 人類學雜誌; vol. 29, no. 5, (1914), p. 165

萩原尊禮「UP 選書 225 地震学百年」(東京大学出版会, 1982. 9), p. 52

[無署名: 青木熊吉氏養老慰勞金募集, 動物學雜誌; 395, (1921. 9), 広告頁]

「古市公威」(故古市男爵記念事業會, 1937. 7)

大久保達正監修「松方正義関係文書 第十三卷」(大東文化大学東洋研究所, 1992. 3), p. 90

山崎直方: 大禮參列日記, 東洋學藝雜誌; vol. 32, no. 411, (1915. 12. 5), pp. 785-795

龜高德平「化學と人生」(寶文館, 1926. 1)

日本学士院編「日本学士院八十年史 資料編二」(日本学士院, 1962. 3)

[末綱愨一: 高木先生の思い出, 数学; vol. 12, no. 3, (1961. 1), pp. 131-132]

無署名: 「世界に認められた数学者 高木貞治の理論の紹介者 ヘルムート・ハッセ 大正末期の高木貞治の弟子 吉田洋一 談」, 牧野昇・竹内均監修 富田仁責任編集『日本の『創造力』近代・現代を開花させた四七〇人 第10巻』(日本放送出版協会, 1993. 6), pp. 314-316 所載

湯川秀樹・北川敏男共著「中公新書 250 物理の世界 数理の世界」(中央公論社, 1971. 5), p. 46

[高木貞治: 方程式ノ根ノ存在ノ「ワイヤストラス」ノ證明ニ就テ, 東京數學物理學會報告; 1, (1901), pp. 56-58]

[高木貞治: 二次ノもーづるニ就テ, 東京數學物理學會報告; 1, (1901), pp. 102-103]

[高木貞治: 誘導函數ヲ有セザル連續函數ノ簡單ナル例, 東京數學物理學會報告; 1, (1901), pp. 176-177]

[高木貞治: 數學小引, 東京數學物理學會報告; vol. 2, no. 6, (1903), pp. 25-29]

[高木貞治: 轉倒ノ法則ニ就キテ, 東京數學物理學會報告; vol. 2, no. 8, (1903), pp. 74-78]

大日本文明協會編「日本の科學界」(大日本文明協會事務所, 1917), p. 322

柳澤健「回想の巴里」(酣燈社, 1947. 10), pp. 22-24

彌永昌吉「若き日の思い出 数学者への道」(岩波書店, 2005. 6), p. 96

[無署名: 科學者も亦戦ふ 數學の神様, 煙幕の辯 高木貞治博士, 讀賣新聞朝刊; 22593, (1939. 12. 18), p. 7]

寺田寅彦「寺田寅彦全集 第二十巻」(岩波書店, 1998. 9)

寺田寅彦「寺田寅彦全集 第二十一巻」(岩波書店, 1998. 10)

寺田寅彦「寺田寅彦全集 第二十二巻」(岩波書店, 1998. 11)

寺田寅彦「寺田寅彦全集 第二十六巻」(岩波書店, 1999. 4)

本田欣哉: 「数学理論 類体論を創造した高木貞治」, 牧野昇・竹内均監修 富田仁責任編集『日本の『創造力』近代・現代を開花させた四七〇人 第10巻』(日本放送出版協会, 1993. 6), pp. 303-313 所載

[無署名:カイゼル髯が流行の伯林の給仕さん ドイツ土産も数多く理學部の竹内教授歸る, 帝國大學新聞;195, (1927. 1. 31), p. 3]

中山忠直「漢方醫學の新研究」(寶文館, 1927), p. 388

[無署名:高木教授に名譽博士 アーベル氏の百年祭に, 東京朝日新聞;15416, (1929. 4. 8), p. 7]

[古賀軍治:獨逸二大學の追憶, 學習院時報;18, (1931. 12), pp. 28-33]

[有山兼孝:物性論における一連の問題, 物性研究;vol. 29, no. 2, (1977. 11), pp. 53-68]

[澤瀉久孝:國語について感じたこと, 國語國文;vol. 5, no. 8, (1935. 5), pp. 99-118]

[無署名:平山, 高木兩教授 近く萬國大會へ, 帝國大學新聞;429, (1932. 4. 25), p. 2]

[無署名:安藤幸子女史等歸る, 東京朝日新聞日刊;16742, (1932. 12. 4), p. 2]

[安藤幸:私の遭遇したさまざまの場合三 外遊の思い出, 婦人之友;vol. 46, no. 6, (1952. 6), pp. 42-45]

[無署名:新進數學者に次回から授賞 萬國數學協會總會から高木教授歸る, 帝國大學新聞;459, (1932. 12. 19), p. 2]

西田幾多郎「西田幾多郎全集 第十九卷」(岩波書店, 1953. 7)

野上彌生子「野上彌生子全集第Ⅱ期 第十一卷」(岩波書店, 1988. 5)

野上彌生子「野上彌生子全集第Ⅱ期 第十二卷」(岩波書店, 1988. 7)

田邊元「數理の歴史主義的展開 數學基礎論覺書」(筑摩書房, 1954. 12)

[島雄元:田邊元資料の整理報告(2), 長岡工業高等専門学校研究紀要;vol. 35, no. 1, (1999. 3), pp. 55-68]

[無署名:春を前に逝く 藤澤利喜太郎博士 わが數學界の先驅者, 帝國大學新聞;507, (1934. 1. 1), p. 9]

[高木貞治:藤澤先生を憶ふ 附ポール・ハンルヴエ記, 帝國大學新聞;510, (1934. 1. 22), p. 8]

[無署名:高校文科の數學をグット面白くする 高木, 田邊博士等を講師に 授業法改革の講習, 帝國大學新聞;604, (1935. 12. 16), p. 5]

[眞羅劫:「一般的教養としての數學」, 圖書評論;19, (1937. 2), pp. 11-14]

[無署名:七月, オスローに數學の國際協力 我國から藤原教授(東北大)を派遣 期待さる萬國數學大會, 帝國大學新聞;609, (1936. 1. 27), p. 2]

[無署名:停年教授物語 8 數學の高峰を極む ノートをとらぬ學生時代 理學部 高木貞治教授, 帝國大學新聞;615, (1936. 3. 9), p. 2]

土井晚翠「雨の降る日は天氣が悪い」(大雄閣, 1934. 9), pp. 133-134

[無署名:學術交歡の魁け 世界的な數學者 佳話を持つて來訪, 朝日新聞日刊;17884, (1936. 1. 30), p. 11]

天羽英二著 天羽英二日記・資料集刊行会編「天羽英二 日記・資料集第 3 卷(日記篇)」(天羽英二日記・資料集刊行会, 1990. 10)

野上彌生子「野上彌生子全集第Ⅱ期 第五卷」(岩波書店, 1987. 5)

[無署名:根氣強い日本の學生 三時間ブツ通して聴講 ゼベリ博士から學生への言葉, 帝國大學新

- 聞;612, (1936. 2. 17), p. 2]
- [高木貞治: 近く來朝のイタリーの數學者セヴエリ博士に就いて, 東京朝日新聞朝刊;21173(1936. 1. 18), p. 10]
- [鍋島信太郎: せうえり教授, 日本中等教育數學會雜誌;vol. 18, no. 3, (1936. 5), pp. 177-178]
- 柳沢健「伝記叢書 269 生きて来た道」(大空社, 1997. 9), pp. 180-181
- [無署名: 明治三十四年ニウトン祭の記, 東洋學藝雜誌;244, (1902. 2. 25), pp. 49-51]
- [杉村欣次郎: 國枝先生の思い出, 数学教育;vol. 8, no. 6, (1954), pp. 162-164]
- [無署名: 東北大學の理學部長 快活で敏腕の林博士と内定, 東京朝日新聞;11857, (1919. 6. 23), p. 5]
- 下平和夫「日本人の数学 和算」(河出書房新社, 1972. 1), pp. 180-181
- 森毅「国土新書 42 数学文化の教育と歴史」(国土社, 1971. 7)
- [無署名: 林鶴一博士 和算の權威者, 帝國大學新聞;593, (1935. 10. 7), p. 7]
- [無署名: 稀親書の和算書現る 故林鶴一博士の教室から出た孝和著“關算四傳書”, 帝國大學新聞;600, (1935. 11. 25), p. 6]
- 慶應義塾編「慶應義塾百年史 中卷(後)」(慶應義塾大学, 1964. 10), pp. 2411-2467
- 相山義道:「戦時下科学特別教育と科学組の思い出」, 佐々木元太郎・平川祐弘『特別科学組 もう一つの終戦秘話 東京高師附属中学の場合』(大修館書店, 1995), pp. 108-115 所載
- 下田将美「藤原銀次郎回顧八十年」(大日本雄辯會講談社, 1949. 12), pp. 220-221
- [武見太郎: 塾の再興者, 小泉信三全集月報;5, (1967. 8), pp. 92-94]
- [無署名: 數學で増産に協力 近く工員たちにも開く“數學道場”, 朝日新聞日刊;24175, (1943. 3. 24), p. 3]
- 高木貞治:「Zur Axiomatic der ganzen und der reellen zahlen. 院紀 21 (1945), 111-115」, 日本数学会科学技術史編集部編『科学技術史集書 数学の概観(1940~1949)』(日本學術振興会, 1951. 11), p. 2 所載
- 日本学士院編纂「日本学士院八十年史 資料編三」(日本学士院, 1963. 3)
- 小泉信三「小泉信三全集 第二十五卷上」(文藝春秋, 1972. 9), pp. 405-406
- [田村茂: 現代日本の百人, 文藝春秋;vol. 28, no. 2, (1950. 2), p. 7]
- [高木貞治: 講和に對する意見・批判・希望, 世界;70, (1951. 10), pp. 190-191]
- [高木貞治: 一數學者の回想, 文藝春秋;vol. 33, no. 21, (1955. 11), pp. 106-111]
- 木村佳壽:「正田先生の思い出」, 正田建次郎先生エッセイと思い出編纂委員會編『正田建次郎先生エッセイと思い出』(啓林館, 1978), pp. 520-522 所載
- 志村五郎「記憶の切絵図」(筑摩書房, 2008), pp. 168-169
- [増田義彦: 高木博士の一行日記, 実業之日本;vol. 63, no. 7, (1960. 4. 1), p. 15]